

日本・朝鮮におけるニヴフ語要素

—アムール語族を軸とした北東アジア言語史考察—

宮野 聡¹ (MIYANO, Satoshi)

要約

本稿では言語学的な観点から北東アジアにおけるニヴフ語の先史を調査する。ニヴフ語は現在消滅の危機に瀕しているが、遠い過去の北東アジアにおいて現在よりも主要かつ影響力のある立場を占めていたことが言語学的な情報から示唆されている。また歴史的な文脈において、ニヴフ語は古代満州地域で強勢を誇った扶余民族の言語との関連性が指摘されており、本稿ではこの予想の可否・妥当性を言語学的視点で評価する。具体的には扶余民族の影響を多大に受けたことが歴史的に示唆される日本および朝鮮に分布する諸言語とニヴフ語の間で共通の言語学的要素（語彙）を調査し、これらの共通要素について影響の方向・時系列を言語学的に考察する。最終的にはこれらの言語学的知見から得られる情報をまとめ、北東アジア言語史の部分的な再構築を試みる。

1. 序論

ニヴフ語 (Nivkh) はロシア極東のアムール川河口及びサハリン島で話される言語であり、歴史的にはギリヤーク語 (Gilyak) という名称でも知られている。ニヴフ語と他の言語との系統関係 (genetic relationship) は証明されておらず、孤立した言語として扱われている。知られている歴史において、ニヴフ語は常により“強い”近隣言語の脅威にさらされており、近代ではロシア語および日本語、それ以前にもツングース諸語やアイヌ語によってその分布が圧迫されている。この結果としてニヴフ語は現在消滅の危機に瀕しており、話者は高齢者に限られその数は年々減少している。

この言語は現代において弱い立場に立たされているが、遠い過去においてはまったく違った側面を持っていたことを Janhunen (2010, 2016) は指摘している。Janhunen によればニヴフ語が属するアムール語族²は広義の満州地域 (Manchuria) に属し、過去において地理的にこの地域のより中心的な位置を占めていたはずだという。また近世～近代のニヴフ民族は比較的“原始的”な漁労生活を送っていることで知られているが、周囲の言語とは独立して冶金に関する語彙を持つなどの言語学的な情報からニヴフ語(の祖先)はかつてより“高度”な文化に属していたことが示唆される。Janhunen (2005) はまた、中国の史書にみられる古代満州の扶余民族がアムール語族話者であった可能性を指摘しており³、この扶余民族が朝鮮半島の百済王国、及び日本列島の大和王権の歴史に深くかかわっていることは長く指摘されて

¹ 所属なし。メール: srampax90@gmail.com

² 本稿では Janhunen に従い、ニヴフ語が属する言語系統をアムール語族 (Amuric) と呼称する。

³ Janhunen はまた朝鮮三国時代に満州から朝鮮半島にかけて版図を誇った高句麗の支配層言語がアムール語族であった可能性も (強くではないが) 指摘している。

いる通りである (江上 1964, 1967⁴)。

本稿では上述のように示唆に富むニヴフ語の歴史を言語学的な観点から探っていきたい。具体的には日本及び朝鮮の言語において、アムール語族との言語接触によって生じたと見られる(アムール語族との)共通語彙の存在を調査する。またこれらの共通語彙が確認された場合、言語接触の時系列および影響の方向について言語学的な考察を行う。仮に扶余 = アムール語族という仮説が正しい場合、日本及び百済の言語においてアムール語族が起源である語彙が見られることが予想される。最終的には得られた言語学的な情報をもとに、アムール語族を軸とした北東アジア言語史再構を試みる。

本稿の構成は以下の通りである。§1 で本稿の背景と狙いを説明した。§2 では本稿で扱う言語、および言語比較を行う上での取り決めをまとめる。§3 において本稿の主題であるアムール語族・日本語族・朝鮮語族の語彙比較を行う。§4 では言語学的な比較から得られた情報をもとに各言語の史的関係を考察する。最後の§5 は本稿の総括である。

2. 本稿で扱う言語と言語比較の取り決め

2.1 比較する言語

本稿で調査する言語は以下の通りである。

・アムール語族：

ニヴフ語諸方言⁵の比較から得られるニヴフ祖語 (Proto-Nivkh) を主な参照対称とする。

・日本の言語：

日本に関して、弥生時代以降の主要な言語系統は日本語族 (Japonic/日流語族)であり、これに属する日本語 (上代日本語、中古/中世日本語)と琉球諸語を調査の対象とする。

・朝鮮の言語：

歴史的に朝鮮半島の百済に相当する地域では複数の系統の言語が話されていたと考えられ、少なくともシナ語派 (Sinitic)、日本語族 (Japonic)、朝鮮語族 (Koreanic)の存在が史料から判明している⁶。日本書紀に見られる百済語彙には朝鮮語族に属する語彙が多く (Bentley 2000, Vovin 2013)、本稿の議論において少なくとも朝鮮三国時代における主要な言語は朝鮮語族の系統であったと仮定する⁷。扶余民の言語学的な影響はこの百済における朝鮮語 (便宜的に百済語⁸と呼ぶ)においてもっとも大きかつ

⁴ Ledyard (1975)も参照

⁵ Amur Nivkh (AN), East Sakhalin Nivkh (ESN), North Sakhalin Nivkh (NSN), South Sakhalin Nivkh (SSN) の四つが代表的な方言である。

⁶ 朝鮮半島における日本語族に属する言語に関しては朝鮮の歴史書「三国史記」に記録された地名からその存在が確認できる。この言語の名称は定まっておらず、Para-Japonic (Janhunen 2005), Peninsular-Japonic (Vovin 2017)などが使用されている。

⁷ ここでは論じないが朝鮮三国の最後の一つである高句麗ではアムール語族・朝鮮語族・ツングース語族などの言語が話され、各言語の勢力は歴史的に変遷していったと考えられる。

⁸ Paekche Old Korean (POK)

たはずである。しかし朝鮮語は 15 世紀のハングル制定以前の記録が非常に断片的であり、百濟語の具体的な語彙体系を知ることはほぼ不可能である。そこで朝鮮語を参照する際には記録が多く残る中世朝鮮語を主な参照対称とする。中世朝鮮語は新羅の朝鮮語（便宜的に新羅語⁹と呼ぶ）の後裔と考えられており、新羅による朝鮮半島の統一の際、百濟語を置き換える形で広まった。この過程において中世朝鮮語は百濟語の要素を受け入れているはずであるが、これを新羅語本来の要素と区別できるかは未知数である。

2.2 言語の表記について

今回比較するアムール語族・日本語族・朝鮮語族の中で特に重要な三言語（ニヴフ祖語、上代日本語、中世朝鮮語）について記載法などを以下に示す。

・ニヴフ祖語 (PN:Proto-Nivkh) :

ニヴフ祖語の語形及びグロスは特に注釈がなければ Fortescue (2016) による。その他現代ニヴフ語の諸方言についても同様である。ただし [j] は y で表記した。

・上代日本語 (OJ:Old Japanese) :

転写はオックスフォード上代日本語コーパス (OCOJ) に準拠する。ただしエ段に関して、乙類のエを特に ey と表記した。Pre-OJ の語形は筆者の再構である。

子音 : p, b¹⁰, t, d, k, g, s, z, m, n, y, w

母音 : a, ye (=e₁), ey (=e₂), i (=i₁), wi (=i₂), u, wo (=o₁), o (=o₂)

・中世朝鮮語 (MK:Middle Korean) :

転写は Yale 式を用いる。

子音 : p, W [β], t, c [ts], k, G [ɣ], s, z, h, m, n, ng [ŋ], l [r~l], y

母音 : a, e [ə], i, o [ʌ], u [i], wo [o], wu [u]

2.3 音韻の対応関係について

借用関係における音韻対応は系統関係に起因する同根語と比較して不規則な対応になりやすい。しかし各言語における語彙を比較する上での目安として便宜的に “一般的” と考えられる対応を考えることが可能であり、PN・OJ・MK の間におけるこのような対応を以下に示す。この “対応” はあくまで言語接触によるものであり、比較言語学において言語の系統関係を論じる際に用いられるような厳格な音韻法則ではない。

⁹ Silla Old Korean (SOK)

¹⁰ 音韻的に日本語の濁音子音は前鼻音化した [mb], [nt], [ŋg], [nz] であったとされる。

2.3.1 母音の対応

表 2.3.1 に各言語の母音の対応をまとめる。ニヴフ語では広母音 $V_L = [e, a, o]$ と狭母音 $V_H = [i, ə, u]$ がそれぞれ調和関係となっている。 V_H/V_L のどちらが語形として現れるかは完全には理解されておらず、接辞などによって影響され、方言によって異なる場合もある。このため母音の高さに関する対応はある程度“緩い”ものになる。

表 2.3.1 母音の対応

Language	PN		OJ	MK
	V_H	V_L		
Front Vowel (I)	i	e	i, ey?	i, e?
Central Vowel (A)	ə	a	o (< *ə), a	u, o, a
Back Vowel (U)	u	o	u, wo	wu, wo

2.3.2 子音の対応

ニヴフ語は日本語・朝鮮語と比較して非常に豊富な子音体系を持つが、内的再構からこれらの体系は(PN以前の)より単純な体系から変化したものであることが示唆される (Janhunen 2016)。ニヴフ語の語彙の PN 以前の語形を推測するためには、子音交代 (consonant alternation/mutation) の概念を考慮する必要があり、ニヴフ語では硬音 (fortis stop) は無声継続音 (voiceless continuant) と、軟音 (lenis stop) は有声継続音 (voiced continuant) とある種の条件で交代する。多くの場合、PN の継続音は閉鎖音が弱化したものであると考えることができ¹¹、このことを念頭に入れ PN・OJ・MK の子音対応を整理すると表 2.3.2 及び表 2.3.3 のようになる。

表 2.3.2 子音の対応 (阻害音)

Language	Symbol	PN				OJ	MK
		Fortis Stop	Voiceless Continuant	Lenis Stop	Voiced Continuant		
Labial	P	p	f	b	v	p, (b) ¹²	p~W ¹³
Alveolar	T	t	ř	d	r	t, (d), r	t~l
Palatal	C	c	s	d'	z	s, (z), t ⁻¹⁴	s~z, c
Velar	K ¹⁵	k	x	g	y	k, (g)	k~G, h
Uvular		q	X	G	R		

¹¹ただしすべての継続音が閉鎖音の弱化形であるかは定かではない。特に PN *r が他の言語の流音と対応している例がいくつか見られ、これらはアムール語族における primary な *r の存在を示唆している可能性がある。

¹²日本語における濁音子音 b, d, z, g と PN 子音の対応は例外的である。

¹³中世朝鮮語の子音 W, l, z, G は閉鎖音 p, t, s, k が語中で弱化したものと考えられる。

¹⁴PN 子音が語頭の閉鎖音 c, d' であり、後続する母音が非前舌母音 A, U である場合。

¹⁵Janhunen によれば軟口蓋音と口蓋垂音はほぼ相補分布 (complementary distribution) の関係にあり、もともとは同じ音素であった。

表 2.3.3 子音の対応 (非阻害音)

Language	PN	OJ	MK
Labial Nasal	m	m	m
Alveolar Nasal	n	n	n
Palatal Nasal	n'	n(i)?	n(y) > ∅
Velar Nasal	ŋ	∅	?
Labial Glide	w	w, (p) ¹⁶	p
Palatal Glide	y	y	y
Lateral Liquid	l	n-?, -r-	l
Glottal Fricative	h	k	h

2.4 日本語の動詞の分析について

本稿における日本語動詞の形態論的分析は Russell (2006) に基づく。日本語の動詞は**語幹 (stem)** に対して**活用 (inflection)** 接辞がつくことで具体的な**語形**となる。またこの語幹はさらに細かく分解できることがあり、より根本的な**語根 (root)** と**派生 (derivation)** 接辞からなる。今回の語彙比較において、動詞の語幹はそのまま表記するが、語根については「√」を先頭につけて特に明記する。

以下に OJ 語形「渡らぬ/wataranu ‘not crossing’」の具体的な分析例を示す。

語形: wataranu < watar-an-u ‘cross_NEG_ATTR’

語幹: watar- ‘go across (intr)’ < *√wat(a)-Ar-

活用接辞 -an- ‘negative’, -u ‘attributive’

語根: *√wat(a)⁻¹⁷ ‘go across’

cf. watas- ‘make it go across (tr)’,

wata ‘sea < that which is crossed’

派生接辞: -Ar- ‘intransitive’

また日本語における主な派生接辞は以下の通りである。

- -As- ‘transitive’
- -Ar- ‘intransitive’
- -Ai- ‘transitivity flipper’¹⁸
- -Ap- ‘durative’
- -Am- ‘verbalizer’
- -Ak- ‘?’¹⁹

¹⁶ 朝鮮語族を解した借用関係で対応する。

¹⁷ 語根末の母音は括弧書きとした。この母音が実際に語根に属すかどうかの議論は本稿では扱わない。

¹⁸ この派生接辞については異なる解釈も可能であるが本稿では便宜的にこの表記を使用する。Frellesvig & Whitman (2016) も参照。

¹⁹ 派生接辞 -Ak- の機能は定かではない (Russel 2006)。

3. 語彙比較

本章では本稿の主題である各言語の語彙比較を行う。各節の内容は以下のとおりである。

§3.1 (No. 1-5)

今回の語彙比較において、音韻対応・借用過程など言語学的な観点から特に重要な例をまとめる。

§3.2 (No. 6-40)

上記以外の主要な語彙比較をニヴフ語単語のアルファベット順で列挙する。

§3.3 (No. 41-43)

特に“扶余民族”と文化的つながりが強いいくつかの語彙についてアムール語族との比較を行う。

今回の言語史考察で取り扱う語彙は上記項目のものである。そのほか参考として、関連する可能性があるものの音韻・意味の対応に問題がある語彙比較を付録 (No. 44-128) に列挙する。

3.1 言語学的に重要な語彙比較 (No. 1-5)²⁰

(1) PN *tlanj < *tVla-ŋa-y ‘reindeer’ (Janhunen, 2016)

→ Sakhalin Ainu tunakay ‘id’ → NJ tonakai ‘id’

NJ tonakai ‘reindeer’ がアイヌ語からの借用語であり、究極的にはニヴフ語が語源であることは広く知られている。比較的最近の借用語であるため現在の議論と直接かかわる語彙ではないがニヴフ語の音韻史を知るうえで重要であるため記載している。

ニヴフ語ではこの例でみられる tVl > tl のような子音間の母音消失が激しく、外部の要素 (例えばここではアイヌ語・日本語における借用語) がなければニヴフ祖語で消失した母音の情報を得ることは難しい。またこの PN 単語は *tlə- ‘pull, drag’ と *ŋa ‘animal’ からなる複合語であるが、今回の例のように元の語形が三音節以上の長さを持つと推定される場合は何らかの分解が可能である場合が多い。加えてこの単語で見られるようにニヴフ語では語尾の二重母音 -Vy が単母音 -i に変化する傾向がある。この現象について、以下に示すようにまれにはあるが方言によっては元の二重母音を保った語形を持つものが確認でき²¹、ニヴフ語の語形を遡って再構する際に重要である。

- | | | |
|---------------|--------------------|-----------|
| • AN vaqi | : ESN vaqi ~ vaqay | ‘box’ |
| • AN tavri | : ESN tavray | ‘crab’ |
| • AN n’evrqay | : ESN n’evrqi | ‘eyelash’ |
| • SSN lori | : ESN loray | ‘crane’ |

²⁰ 以後、借用方向を問わず共通の語彙を「=」、借用関係を「→」、言語内変化を「>」で表す。

²¹ 保持されている二重母音の例がすべて口蓋垂音に後続している /ay/ であることは偶然ではないかもしれない。

(2) PN *kuti ‘hole’ = MK kwut ‘cavity’ = OJ kuti ~ kutu- < *kutuy ‘mouth’

ニヴフ語と朝鮮語の間では意味・音韻ともによく対応しており、関連があるのは間違いない。日本語とニヴフ語の比較は意味の対応に若干弱さがあるが、この関係性を認める場合ニヴフ語における語末母音 -i は二重母音 -Vy にさかのぼると見られる。また日本語 *kutuy ‘mouth’ は琉球諸語にも広く見られ、PJ まで遡る語彙である。このため借用の方向は定かではないが非常に古い言語接触によって共有された単語であると推定できる。

(3) PN *qaw- ‘dry’ = OJ kawak- < *√kaw(a)-Ak- ‘id’

言語接触において、名詞だけでなく今回のように動詞の語幹/語根が借用されることはよく見られる現象である。NJ kawarag- ‘dry’ や PR *kawarak- (< *√kaw(a)-Ar-Ak-) ‘id’ の反映系²²を考慮すると、OJ 動詞語幹 kawak- は語根 *√kaw(a)- ‘dry’ と派生接尾辞 -Ak- に分解できる²³。借用の方向は不明であるが日琉祖語分岐以前の段階の言語接触を反映していることは確実である。

(4) PN *crat ‘small bird’²⁴ → OJ sitoto < *sitətə ‘id’

OJ sitoto ‘small bird’ は古事記歌謡 (KK.17)²⁵ にも見られる古い語であるが日本語において出現が限られ²⁶、語源も不明である²⁷。このような語彙は借用語である可能性が高く、PN 単語との音韻・意味的な近さを考えればニヴフ語から日本語への借用語であることはほぼ確実である。§2.1 に記載したようにニヴフ語において /r/ のような継続音は多くの場合閉鎖音からの弱化によって生じたと考えられ、このことは PN /r/ と OJ /t/ が対応していることから確認できる。また OJ 語形を参照すると子音間で消失した母音は前舌母音 I と推定され、第二音節で PN 母音 /a/ と OJ /o/ (< *ə) が対応していることから、ニヴフ語において何らかの調和変換 (V_L→ V_H) が生じたものと考えられる。これらをまとめると pre-PN の語形は *cITAt と表せる。

加えて今回の例では OJ 語形の第三音節にニヴフ語には見られない最終母音 o (<ə) がみられる。これは OJ の音素配列上の制約から音節末子音が許されず、外来語の借用の際に音節末子音に対しては母音の挿入 (通常は反響母音)、もしくは子音の除去が生じるためである²⁸。したがって今回の例において OJ sitoto における最終母音 o は挿入音と判断できる。

(5) PN *wəri < *wəry-i ‘pustule’ → POK → OJ patakey < *patakay ‘mange, scabies’

この項はおそらく本稿において最も重要な語源論となる。OJ patakey > NJ hatake (はたけ/疥: 皮膚病の一種) という単語の語源について、I. 日本語の単語について、II. ニヴフ語の単語について、III. 借用の過程について、の三部に分けて論じる。

²² Shuri kaarach- ‘dry’ など

²³ 動詞形態論については§2.1.3 を参照

²⁴ ニヴフ語における意味は AN c’rat ‘wagtail’、ESN t’rat ‘sparrow’ など。

²⁵ 以下、OCOJ の番号で上代日本語資料を指定する。

²⁶ 琉球諸語には存在しないようであり、現代日本語では死語である。

²⁷ 日本語において三音節以上の単語はほぼ複合語か派生語である。

²⁸ 外国語における音節末子音の後の母音挿入は漢字の二合仮名においてははっきりと確認できる。

例: MC 博 pak, 徳 tok → OJ 博徳 paka-toko ‘personal name’

I. 日本語の単語について

OJ patakey ‘mange, scabies’ は MJ において fatake ~ fadake ‘id’ として現れる。この単語の語源に関し、Martin (1987) は以下のような複合語であると(疑問符付きで)提案している。

MJ fatake~fadake < OJ patakey < *panta ‘skin’ + *kak[a-C]i ‘scratching’²⁹

この語源には二点問題が存在する。まず日本語の歴史において清音から濁音への変化が多くみられるのに対して逆の変化は例外的であり、元の語形は濁音 /d/ ではなく清音 /t/ を持っていたと考えるのが妥当である³⁰。加えて kaki → kai (→ key) のような母音間の子音消失は後世の音便として見られるものの、pre-OJ でこのような変化が生じたとする妥当性は乏しい。これらの理由から上記の語源は誤りと考えられる。この単語は OJ sitoto ‘small bird’ の例と同様に日本語の歴史の中で出現が限られ、語源も不詳であり、借用語である可能性が高い。

II. ニヴフ語の単語について

PN *wəri ‘pustule’ は明らかに PN 動詞 *wər̥k- ‘rot’ の派生語である。また Nikolaev (2015b) では PN 語形を *vəry-i ~ *vərx ‘scab’ と再構しており、こちらの方がより原型に近いと考えられる。ここでは動詞語形を考慮して PN 語形を *wəry-i と記述した³¹。

ニヴフ語において先頭が /y/ もしくは /r/ である子音クラスタの簡略化は共時的な現象として広くみられる (Mattissen 2003)。子音の消失は通常先行する母音の長音化で代償されるがこの長母音は音素的ではない。以下に Panfilov (1962) から該当する子音クラスタ簡略化の例をいくつか示す。

- hays ~ hās ‘clothing’ • muyf ~ mūf ‘day’
- t’uyr ~ t’ūr ‘fire’ • orla ~ ōla ‘child’

加えて通時的にも /y/ (/r/) の消失は珍しい現象ではないが、以下の例に示すようにどのような状況・方言で消失するかはランダムな要素が強いようである。

- AN vivus : ESN viyvur ‘belt’ • AN ŋari : ESN ŋayri ‘shoulder’
- AN vays : ESN vas ‘whitefish’ • AN orri : ESN ori ‘back of neck’

今回扱っているニヴフ語の語彙は方言/資料によっては ESN vər̥k-d ~ vəy̥rkə-d ‘rot’ など子音クラスタの音位転換が生じた反映形がみられ、PN *wəri についてもこのような音位転換が生じたのちに子音クラスタの簡略化が生じたものと考えられる (下記参照)。

²⁹ *kak[a-C]i は OJ kak- ‘scratch’ の名詞化形 kak-i に相当する。

³⁰ 後世で濁音 /d/ が現れるのは (語源が異なる) MJ fada < PJ *panta ‘skin’ の影響もあったと考えられる。このことは「白癩 (lit. white leprosy)」を指す単語として MJ sira-fatake~sira-fadake ‘white-scabies’ と sira-fada ‘white-skin’ が混在していることから強く示唆される。

³¹ ニヴフ語の多くの方言では PN の /v/ と /w/ が合一しているが SSN ではこの区別が保たれており、PN *wər̥k- ‘rot’ の頭子音が *w であることが確認できる。

PN *wəry-i > *wəyri (metathesis) > *wəri (cluster reduction)

最後に言語類型論的な観点から典型的な母音間の子音弱化を想定すると、以下のような pre-PN 語形を再構することが可能である。

PN *wəri < *wəry-i < pre-PN *wATV_k-Vy³² ‘pustule’

III. 借用の過程について

導出した pre-PN 単語は OJ patakey < *patakay ‘mange, scabies’ と意味・音韻が非常によく対応しており、偶然とは考えられない。ニヴフ語の単語が動詞からの派生であることを考えるとニヴフ語から日本語への借用語とするのが妥当である。

この対応には一つ問題が存在し、ニヴフ語の *w- が日本語 p- で反映されていることを説明する必要がある。アムール語族、日本語族はともに祖語段階から /w/ と /p/ を区別するため、直接的な借用関係ではこの対応を説明するのは難しい。そこで /w/ と /p/ を区別しない (/w/ を持たない) 言語が借用の中間にあると考えることでこの対応を説明することが可能である。知られている中で、ニヴフ語・日本語と歴史的なつながりを持ち、このような特性を持つ言語は朝鮮語族のみである³³。しかしこの単語は中世朝鮮語には見られないため、中世朝鮮語に繋がる新羅系統とは別の朝鮮語族言語、すなわち百済語が借用の中間に存在していたと推定できる³⁴。

これらの言語における該当単語の借用関係を表 3.1.1 にまとめる。朝鮮語(族)から日本語(特に上代日本語)への借用語はこの単語以外にも多くの単語が指摘されており (Unger 2009, Vovin 2010)、本稿の調査では今回の例のようにアムール語族から朝鮮語族への借用も複数存在することが示唆されている。この借用関係に見られる Amuric → Koreanic → Japonic という流れは、少なくともある歴史的な時期における三言語の関係において、“カノニカル” と呼べるものなのかもしれない。

表 3.1.1 PN /w/ と OJ /p/ の対応

Language	Amuric /w/ ≠ /p/	(borrowing)	Koreanic (POK) /w/ = /p/	(borrowing)	Japonic (pre-OJ) /w/ ≠ /p/
Form	*wATV _k -Vy ‘pustule’	→	*pAtV _k Vy	→	*patakay ‘mange, scabies’

³² PN *tlanji ‘reindeer’, *kuti ‘hole’ の比較例と同様に -i < -Vy を想定した。

³³ 例えば MK patah ‘sea’ = OJ wata ‘id’ の比較において、OJ wata は *√wat(a) ‘go across’ の派生と解析でき、借用方向は Japonic (Peninsular?) → Koreanic と推定できる。したがって外国語の [w] が朝鮮語の /p/ で受け入れられていることがこの例からも確認できる。

³⁴ 今回のように音韻関係から借用の経路を特定できる状況は、英語史においても似たような例がみられる。例えば英単語 guard, guide, guarantee などは究極的にはゲルマン語由来である。しかしゲルマン祖語の子音 *w が英語の /g/ で反映されており、これらの単語がゲルマン語から直接導入されたのではなくフランス語を経由して英語に借用されたと判断できる。

3.2 その他の主要な語彙比較 (No. 6-40)³⁵

(6) PN *a- ‘over there’ → MJ a- ‘distal demonstrative’

(中古)日本語の指示詞は近称 ko-、中称 so-、遠称 a-/ka- からなる。しかしなぜ遠称が二つのバリエーションを持つのか納得できる説明はない。故にこの関係が真だとすればニヴフ語から日本語への借用と考える方が自然である。

(7) PN *a- ‘kinship prefix’ = MK a- ‘id’ ?= OJ a- ‘id’

ニヴフ語において多くの親族名称に共通の接頭辞 *a- ~ ə- が見られる。また同様に朝鮮語においては親族名称に接頭辞 *a- ~ e- がみられる (表 3.1.2 に各語彙をまとめる)。これらの語彙にみられる共通接頭辞が接触によるものであるのは確かであるが影響の方向は不明である。

表 3.2.1 PN・MK における親族語彙

Proto-Nivkh kinship terms	Middle Korean kinship terms
*ac(i)k(ant) ‘yonger sibling’	acapanim ‘uncle,’
*acik ‘grandmother, mother-in-law’	acomī ‘aunt’
*akan ‘older brother’	ahoy ‘baby,’
*apak ‘uncle’	api / apanim ‘father,’
*atak ‘grandfather-in-law’	atol ‘son,’
*aymalk ‘father-in-law’	azo ‘uncle,’
*əcy ‘old man’	azom ‘kin,’
*əmək, mother’	emi / emanim ‘mother’
*əmyi ‘son-in-law’	ezi ‘mother, parent’
*ətək ‘father’	

上記に加えて日本語においては COJ omo, EOJ amo ‘mother’、及び OJ ane ‘elder sister’、MJ ani ‘elder brother’ などの親族語彙が a- ~ o- で始まっている。しかし日本語の親族語彙において接頭辞 a- が分解できるほど頻度は高くなく、共通語彙と呼べるかは定かではない。

(8) PN *ara ‘almost’, ara- ‘equal in quantity’³⁶ = OJ atakamo ‘as if’ < *ata ‘equivalent, worth’

OJ atakamo ‘as if’ は語根 *ata と係助詞 kamo に分解できる。また OJ atap- < *ata-ap-³⁷ ‘be appropriate, be able to’, atapi < ata-ap-i ‘value’ も考慮すると日本語の語根 *ata ‘equivalent, worth’ を想定でき³⁸、ニヴフ語の単語との比較が可能である。

³⁵ この節の比較はすべてニヴフ語単語のアルファベット順で記載する。

³⁶ cf. AN ərkə ‘very nearly’ (Nedjalkov 2013)

³⁷ この-ap- は動詞の派生接辞 -Ap- ではなく通常の動詞 OJ ap- ‘meet’ だと考えられる。

³⁸ 意味の違いから、この語根と OJ 動詞 atap- ~ atapey- < *√ata-‘give’ は同根ではないと思われる。

(9) PN *a(ra)qm 'hail'³⁹ = OJ ara-re 'id'

OJ arare 'hail' は mizore 'sleet' や sigure 'rainshower' と同様の語尾 -re を持っており、ara-re と分解できる。ニヴフ語の単語は長いため分解が可能だと思われ、仮に *ara-qm と分解できる場合、語尾は PN *qomr 'sand' と関連があるかもしれない。

(10) PN *bar 'stone' = MK pahwoy 'boulder'

借用の方向は定かではない。三国史記に見られる高句麗地名 波兮~巴兮~波衣 *pafiy~pa?iy 'steep hill, precipitous' (Beckwith 2004)、及び東日本の地名において崖を表す NJ hake⁴⁰ < OJ *pakey/pakye などとも関連している可能性がある。

(11) PN *cal- 'drip' → OJ tar- 'drip, hang down'

PN c と OJ t の対応から借用の方向は PN → OJ だと判断できる。

(12) PN *dam(a)- 'silent' = MK tamul- 'shut the mouth'

Francis-Ratte (2016) によれば MK tamul < *tam- 'stop' + *-(o/u)l- 'continuative'。借用の方向は不明。

(13) PN *damk 'hand' → OJ tadamuki < *ta-N-tamuki 'forearm'

OJ tadamuki 'forearm' は一見すると日本語内で分析が可能であるように思われ、これと音韻的に近い語として以下のようなものが存在する。しかしこれらの語と 'forearm' の意味的なつながりを見出すことは困難であり、OJ tadamuki の語源ではないとみられる。

- tadamukap- 'face straight' < *tada-√muk(a)-Ap- (tada- 'just' + *√muk(a)- 'to face')
- tamukap- 'resist' < *ta-√muk(a)-Ap- (ta- 'hand?' + *√muk(a)- 'to face')
- tamukey- 'make offering' < *ta-√muk(a)-Ai- (ta- 'hand?' + *√muk(a)- 'to face')
- tata- 'vertical'

OJ tadamuki は *ta-N-tamuki 'hand-GEN-tamuki' と分解することが可能であり、この場合 *tamuki の語源として PN *damk < *damVk 'hand' が候補として考えられる。そのままでは 'hand's hand' という意味になってしまいよくわからないが、ニヴフ語の *damk が 'forearm' という意味で借用されたと考えれば意味的な派生も理解できる。

(14) PN *data- 'whole' = MK ta 'all'

PN 単語は豊語であると考えられる⁴¹。OJ tada 'just, direct, right away' も何らかの関係があるかもしれない。

³⁹ SSN を除いたニヴフ語諸方言では -ra- が脱落した *aqm の反映形がみられる。

⁴⁰ 「羽毛」「岫」「坵」「埒」「額」「端氣」「端下」などの漢字で表記される。

⁴¹ cf. AN tata-d' '(be) whole'.

(15) PN *d'ək '(a) long time' → OJ toko < *təkə 'everlasting'⁴²

ここで見られる「長い間 > 永遠」のような意味変化は漢字熟語「長久」・「永久」などにもみられ、(少なくとも漢字文化圏では) 一般的である。PN d' と OJ t の対応から借用の方向は PN → OJ だと判断でき、OJ 単語の最終母音は挿入音と見られる。

興味深いことに、日本神話に登場する国之常立神の神名における「常立 (OJ toko-tati 'forever-standing)」は日本書紀の別表記として「底立 (OJ soko-tati 'bottom-standing?)」という変種を持ち、後者の soko は (表記の影響もあり) 通常 OJ soko 'bottom' に同定されている。しかし意味から考えるとこのような変種の存在は説明しにくく、後者の soko は toko 'everlasting' の音韻的バリエーションであるにとらえた方が自然である。この場合、上記 OJ /t/ ~ /s/ の変種はニヴフ語の閉鎖音 d' とその弱化形である摩擦音 z がそれぞれ日本語で反映された結果であるとも捉えられる。

(16) PN *ərəkə(r) 'shore, bank' → MJ ataka, atake *'river mouth'

ニヴフ語の単語は PN *ərŋ 'river mouth' と語根を共有している。日本語の地名「安宅」は語源不詳⁴³であるが、地名の漢字「宅」が二合仮名として使用されていることから非常に古い言葉であるとみられる⁴⁴。歴史的にこの地名を持つ主要な地域は以下の三例であり、いずれも河口や河岸に位置する地で見られる。このため地名の元の意味が 'river mouth' である可能性は非常に高く、ニヴフ語単語が派生語であることを考えるとアムール語族からの借用語であると考えられる。

- ・石川県安宅 (あたか) : 梯川河口に位置
- ・徳島県安宅 (あたけ) : 吉野川河口の三角州に位置
- ・和歌山県安宅 (あたぎ) : 現白浜町、日置川河口に位置

(17) PN *gut- 'fall down' = OJ kuti- 'rot' ~ kutat- 'come down' < *√kut(V)- 'go down, rot'

OJ kutat- 'come down' ~ kutas- 'rot (tr)' ~ kuti- 'rot (intr)' などの動詞から語根 *√kut(V)- 'go down, rot' が再構できる。ほかに日本語の動詞語根としては *√kud(u)- 'collapse' (in OJ kudas-(tr) ~ kudure-(intr))、及び *√kud(V)- 'go down' (in OJ kudas-(tr) ~ kudar-(intr)) なども関係している可能性がある。

(18) PN *gar(ŋ) 'crow' = OJ karasu < *kara-su 'id'

日本語の鳥類名称接尾辞 -su は MJ kara-su 'crow', fototogi-su 'cuckoo', kake-su 'jay' などにおいて確認できる。またニヴフ語にはこの語のように語尾に“不安定な”ŋ が存在するものがいくつか見受けられ、この ŋ は方言によっては消失する (Janhunen 2016)。

⁴² OJ toko 'everlasting' に加えて、OJ toki 'time' や MK cek 'time' も関連している可能性があるが、これらの語は意味・音韻的な対応に問題がある。

⁴³ 語源として、寇が浦 (ada-ga-ura 'enemy-GEN-bay') つまり「異国人が来襲した海岸」という説明がなされることがあるが、音韻変化に妥当性がなくまったくの民間語源である。

⁴⁴ 鎌倉時代末期に源義経が石川県の「安宅関」を渡るエピソードが「義経記」、「八雲御抄」などに記述されており、この地名が少なくとも鎌倉時代以前から存在していることは確実である。

(19) PN *hal ‘skin, body’ → OJ karada < *kara-Nta ‘body’, -gara ‘nature, design’

MJ 複合語 nakigara ‘dead body’ < naki-N-kara ‘pass.away-GEN-body’を考慮すると日本語の単語は kara-da と分解できる⁴⁵。また “性質、模様” を意味する接尾辞 -gara (NJ kamu-gara ‘divine nature’, hito-gara ‘character’) も同じ語源と見られる。PN /h/ と OJ /k/の対応からニヴフ語が語源であると考えられる。

(20) PN *kedr- ‘rub on, grate’ = MJ kedur- ‘shave, plane’ (OJ keydur- ‘comb’)

MJ kedur- ‘shave, plane’ は平安時代初期から文献で確認でき、ニヴフ語の単語と意味が近い。日本語において語尾以外の e (< OJ ye/ey) は例外的であるが、MJ fatur- ~ fetur ‘shave, peel’ を考慮すると日本語の単語は分解可能なものかもしれない。また MJ kedur- と似たような単語に OJ keydur- があるが、こちらはすべて「髪を梳る ‘to comb one’s hair’」という意味で使用されている。「削る」と「梳る」の意味の差は大きく、そもそも語源が違う可能性が高い⁴⁶。

(21) PN *krə ‘cliff, promontory’ = MK kwol ‘valley’ = OJ kura-tani ‘steep valley?’

OJ kura-tani は意味がはっきりしないが、日本語の地名において「クラ」が崖を示していると思われる場合があり (松尾 1952)、これが元来の意味である可能性がある。

(22) PN *liyr < *liy-r ‘wolf’ → MK ilhi ~ ilhuy ~ ilhoy ‘id’

ニヴフ語の -r は動物名につく接尾辞であり、他にも *q’od-r ‘bear’, *laq-r ‘squirrel’, *k’uz-r ‘wolverine’ などに見られる (Nikolaev 2015b)。ニヴフ語の li- と朝鮮語の il- が対応しているが朝鮮語は日本語と同様に語頭に流音を持たない言語であるため、外国語の li- を音位転換 (metathesis) によって受け入れたと考えればスムーズに説明できる。

(23) PN *ma ‘span between fingers’

= OJ made ‘untill, so much that’ < *ma-de ‘span between two hands’, PJ *ma ‘span, interval’

Frellesvig (2010) は OJ made ‘untill, so much that’ が元々名詞であり、後に副助詞 (restrictive particles) として文法化したものであるということを指摘している。このような名詞由来の副助詞の例は以下のように日本語の歴史においていくつも例がみられる。

Restrictive Particle	Nominal Source
・NJ bakari ‘about, only’	< hakari ‘estimate, limit’
・NJ hodo ‘about’	< hodo ‘extent’
・NJ kurai~gurai ‘about’	< kurai ‘rank’
・NJ dake ‘only’	< take ‘height’

⁴⁵ 成分 -da < -Nta の意味は定かではない。

⁴⁶ OJ keydur- の key- は OJ key ‘hair’ と同定できる

日本語の史料において名詞としての「マデ」の用例は確認できないが、文献学的知見からその意味を間接的に知ることは可能である。万葉集のいわゆる「戯書」表記において、助詞「マデ」に対して以下のような表記が存在する。(相当する部分を太字で示す。)

・幾代左右二賀	ikuyo made ni ka	(MYS.1.34a) ⁴⁷
・千代二手	ti-yo made ni	(MYS.1.79)
・舟泊左右手	pune paturu made	(MYS.7.1189)
・乏諸手丹	subye na-ki made ni	(MYS.10.1997)

これらの例から「マデ」の意味は左右の両手と何らかの関わりがあることがわかる。上で示した副助詞化した名詞の例がいずれも物事の程度を表す単語であることを考慮すると、名詞としての「マデ」の意味は OJ において「両手(を広げた際)の幅」とするのが妥当であり、pre-OJ *made 'span between two hands' を想定することが可能である。

この単語が意味的・音韻的に PN *ma 'span between fingers' と近いことは見逃せず、同根語であると考えられる。また OJ made における語尾の -de は usiro-de 'back side', naga-te 'lengthwise' などに見られる空間接尾辞 -te ~ -de 'space, side, direction' に同定できる。

加えて PN *ma は PJ *ma 'span, interval' と比較が可能である。音韻的には完璧な対応であるが、意味の対応は少し離れる。このことは両者がより古い言語接触によって共有されたものであることを示しているかもしれない。

(24) PN *nav < *na-v 'now', *nana 'recently'⁴⁸ = PR *nama < *na-ma 'now'

PN *napə 'untill now'⁴⁸ → OJ napo 'still'

PN *na-v 'now', *nana 'recently' などからアムール語族の語根 *na 'now' が確認できる (Fortescue 2011)。琉球語の *nama < *na-ma 'now-interval' は本土日本語には見られず、これが日流語族における古い語の保存であるのか新たな語の受け入れなのかは判然としない。OJ napo 'still' は日本語内で分解ができず、PN *napə 'untill now' からそのまま借用したと考えるのが妥当と思われる⁴⁹。

(25) PN *n'e- 'put on head or shoulders'

→ MK ni-, nyey-, i- 'put on head, place above' ?= OJ ni 'burden'

朝鮮語における不安定なオンセット ny- はニヴフ語の子音 n' [ɲ] を反映したものと考えられる。また OJ ni < *nəy は百濟語 *nə(y) 'burden' (Bentley 2000)からの借用とされてきたが、両者ともにニヴフ語が究極的な起源である可能性がある。

⁴⁷ 斜体部は表音表記。

⁴⁸ cf. AN nana 'just now', napa 'still' (Nedjalkov 2013)

⁴⁹ 接尾辞 -pə がニヴフ語内で分析可能かについては更なる調査が必要である。

(26) PN * η azl ‘foot’, * η acy ‘leg’ → OJ asi < *asuy, a- ‘foot, leg’

日本語の asi ‘foot, leg’ は琉球諸語には殆ど見られない語彙であり、両者が分かれた後に日本語が独自に借用した語彙である可能性が高い。また以下に示す二つの独立した証拠から第二音節の母音は歴史的に乙類イ wi (< *uy) であることが推定でき⁵⁰、pre-OJ 語形は *asuy と再構できる。

証拠 1：神社名

福井県の足羽(あすわ)神社 (NJ Asuwa < OJ *Asupa)、岡山県の足次山(あすわやま)神社 (NJ Asuwa-yama < OJ *Asupa-yama) などの名称表記では漢字「足 ‘foot’」が asu と読まれており、OJ asi ‘foot, leg’ の異形態 asu- が確認できる⁵¹。

証拠 2：天皇名 (非確定的)

日本書紀において第 24 代仁賢天皇の諱⁵²は ”大脚 opo-si”, ”大為 opo-su”, “大石 opo-s(w)i”⁵³ などの変種を持ち、最終音節のバリエーションから元の語形は *opo-swi と再構できる。最初の訓表記は名前の語源が opo-(a)si ‘big-foot’ であることを示している可能性があり、その場合は asi < *aswi が直接確認できる。また先述の語源が誤りだとしても、名前の最終音節 si < *swi を漢字「脚 ‘leg’」で表記していることは OJ asi ‘foot, leg’ の第二母音が歴史的に乙類イ wi 相当であることを強く示唆している。

加えて OJ asi は複合語において a- という異形態も持っており⁵⁴、EOJ では a ‘foot, leg’ という単独形での使用も確認されている (MYS.14.3387)。このような asi ~ a のバリエーションは日本語内部の機構では説明がつかず、もともと別の語であったのではないかという推測ができる。

ニヴフ語 * η azl ‘foot’, * η acy ‘leg’ の共通語根は *(a)c- と記述できる。また * η (a)- は身体語彙につく接頭辞であり、* η ayri ‘shoulder’, * η ayzər ‘tooth’, * η iv ‘heart’ など多数の語で確認できる (Nikolaev 2015b)。このため PN * η azl, * η acy に見られる母音 a が語根由来か接頭辞由来かは定かではない。語根に a が存在する場合日本語の語形と PN 語根 (*ac-) との直接比較が可能であり、また語根に母音 a が無い場合でも PN * η - → OJ \emptyset - という対応を想定することで接頭辞付きの PN 語形 (* η a-c-) と日本語の語形の比較が可能である。以下に PN 語形と OJ 語形の対応をまとめる。

- PN * η azl < *(η (a))-(a)c-Vl ‘foot’ → pre-OJ *asur > *asuy > OJ asi ‘foot, leg’
- PN * η acy < *(η (a))-(a)c-(y) ‘leg’ → pre-OJ *a > COJ a-, EOJ a ‘foot, leg’

⁵⁰ 上代日本語において子音 s, t, r, n, w, y につくイ_甲 (i) とイ_乙 (wi) は区別されないが、形態論的な関係から潜在的な母音を示唆される場合がある。例えば ‘kuti ~ kutu- ‘mouth’ の異形態の関係から OJ kuti の最終母音は乙類イ (wi) 相当であると分かる。

⁵¹ OJ *asupa という読みはこれらの神社名の由来である阿須波神の名称からも支持される。この阿須波神 (OJ asupa) および共に祀られる波比岐神 (OJ papiki) の語源は不詳である。

⁵² 以下は伝統的な読みに基づいており、上代日本語資料で表音表記されているわけではない。

⁵³ 石上神(いそのかみ)神宮などに見られるように OJ isi ‘stone’ は異形態 iswo- を持つため、第二母音は(歴史的に)乙類イ wi であると確認できる。

⁵⁴ a-gak- ‘struggle’, a-bumi ‘stirrup’ など

ニヴフ語の二つの語 **ɲazl*, **ɲacy* はそれぞれ日本語における *asi*, *a-* という二つの形態と対応しており、もともとニヴフ語で別の単語 (*foot* ≠ *leg*)であったものが両者の意味を区別しない日本語に入ったことで混交し、同じ語の異形態として扱われるようになったと推定できる。

(27) PN **ɲaz-* ‘shallow’ → OJ *asa-* ‘id’

上記の PN **ɲazl* ‘foot’, **ɲacy* ‘leg’ の例と同様に PN **ɲ-* → OJ *∅-* という対応を想定した。

(28) AN *pasq* ‘one of a pair’, -*vasq* ‘classifier for paired objects’ = MK *pcak* ‘(one of a) pair’

ニヴフ語の単語について Fortescue (2016) は祖型として PN **barq* ‘half’ を再構しているが、MK 単語との比較からこの再構には修正が必要だと考えられる⁵⁵。ここでは単に AN 語形でリストした。

ニヴフ語の助数詞 -*vasq* は目や手など通常二つ一組となる物を数える際に用いられる。数える単位は組ではなく個別の物であり、例えば下の *me-vsq* の意味は “二組” ではなく “二つ” である。詳細は Gruzdeva (2004) を参照。

例) *n’-vasq* ‘one-CL’, *me-vsq* ‘two-CL’, *d’-fasq* ‘three-CL’

(29) PN **poti* ‘string, rope’ = OJ *podas-* < **√pwod(V)-As-* ‘tie up, bind’

OJ の音韻では *po* と *pwo* の区別がないが、有坂の法則より *a* と *o* が語幹に共存しないため⁵⁶、OJ *podas-* の第一母音は甲類オ (*wo*) であると考えられる。PN の閉鎖音と OJ 濁音の対応は PN **kedr-* ‘rub on, grate’ の例にも見られる。

(30) PN **qacɲ* ‘kind, sort’ = MK *kaci* ‘id’

この語はツングース諸語にも見られる (例えば満州語 *hacin* ‘kind, sort’)。Vovin (2013) はツングース語内の音韻対応の不規則さを理由に朝鮮語から満州語への借用を主張しているが、ニヴフ語が究極的な起源である可能性も排除できない。

(31) PN **qar* ‘spade’ = MK *kal-* ‘plow, cultivate’ ? = OJ *kara-suki* ‘t.o. spade’

PN と MK では名詞と動詞の比較になるが意味・音韻が対応していることから関係があると思われる。またこの語は PN **qarp*(*qav*) ‘scratch’, *qarpr* ‘sqraper (for hides)’ などとも関連しているかもしれない。日本語の *kara-suki* (韓鋤) は通常 ‘韓 (から) の鋤’ という意味で捉えられるが民間語源である可能性がある。

⁵⁵ アムール語族や朝鮮語族の再構は本稿の趣旨から外れるため深入りはしないが、両者ともに単語の祖型は **PACAK* ‘one of a pair’ のような形であると考えられる。

⁵⁶ COJ の動詞語幹における唯一の例外は OJ *tomar-* ‘stop’ だけのものである。(Russell 2006)

(32) PN *qalŋ < *qala-ŋ ‘tribe’ = OJ kara ‘blood kin’? = MK hal ‘*clan’

この語はツングース諸語 (Proto-Tungusic *kala ‘clan, lineage’) にも見られる (Janhunen 2016)。また OJ kara は u-kara ‘relatives’, para-kara ‘siblings’ などの複合語の成分として確認できる。これらの語が共通語源を持つことは確かであるがその経路には不確かさが残る。Janhunen (2016) はニヴフ語の単語が PN *ka (qa) ‘name’ に由来する可能性を提案しており、これが正しければアムール語族が究極的な語源となる。

加えて Francis-Ratte (2016) によれば朝鮮語においても MK hal-ŋapi ‘grandfather’ < *‘clan-father’ から hal ‘*clan’ が再構できる。この場合朝鮮語に見られる語頭の h はツングース語内の音韻変化 (k → x) が生じた後に借用されたものとして説明できる。

(33) AN, ESN qos ‘twig for stringing smelt’⁵⁷ → POK → OJ kusa ‘branch’ in *saki-kusa* (三枝)

OJ saki-kusa ‘three-branch (三枝)’ が朝鮮語からの借用語であることはすでに指摘されている通りである (Vovin 2010, Unger 2014)。第一要素の OJ saki ‘three’ は MK seyh < *seki ‘id’ に同定され、この pre-MK 語形 *seki については朝鮮語における内的再構からも支持される (Vovin 2010)。一方で第二要素の OJ kusa ‘branch’ は MK kaci ‘id’ に比定されることもあるが、母音が対応しない。

OJ kusa ‘branch’ に対してより音韻対応が確かな語源候補としては AN qos ‘twig for stringing smelt’ が存在する。この単語は現代ニヴフ語では smelt (魚の一種) を縛るための枝、およびそれを数えるための助数詞という限定された意味を持つ (Gruzdeva 2004)。しかしこのような専門的な用法が単語本来の意味だとは考えにくく、単に ‘twig’ を意味する語が助数詞として用いられるようになり、のちの時代に意味が専門化した可能性がある。この場合、ニヴフ語で一般に ‘twig’ を表す AN ŋaks/ESN ŋaks ~ ŋakŋ などの語⁵⁸は AN/ESN qos の派生語であるとも考えられる。一方 AN/ESN qos の他の語源候補として、AN ro-d’ ~ -qo-d’/ESN roi-d’ ‘string, thread (v.)’ などの動詞⁵⁹の派生語であるというものがあり、仮にこちらの語源が正しい場合 AN/ESN qos と OJ kusa 関係は成り立たなくなる。ニヴフ語 qos についていずれの意味が本来的であるかについてはさらなる調査が必要である。

仮に AN/ESN qos の元来の意味が ‘twig’ であり、OJ kusa との関係が成り立つ場合、OJ saki-kusa は朝鮮・アムールの混種語となる。加えて OJ saki ‘three’ および kusa ‘branch’ という形態素はいずれも saki-kusa 以外の語では見られず、saki-kusa という単語は複合語としてそのまま朝鮮語から借用されたものと考えられる。また MK には saki-kusa に対応する複合語がみられないことからこの借用元は百済語であると判断でき、saki-kusa の祖型は百済語内で形成されたこととなる。すなわちこの語源が正しい場合、この単語は日本語におけるニヴフ語要素であると同時にニヴフ語の単語が百済語に借用された証拠でもある。

⁵⁷ 語形は現代ニヴフ語のものであり、AN と ESN の両方で助数詞および単独の用法が確認されている (Panfilov 1962)。

⁵⁸ Fortescue (2016) では PN *ŋakr ‘twig, stick’。この単語も qos と同様に縛った smelt の束を数えるための助数詞として用いられる (Gruzdeva 2004)。

⁵⁹ Fortescue (2016) では PN *go- ‘thread’

(34) PN *tləyi 'lynx' = OJ twora 'tiger'

ニヴフ語の単語は祖型が三音節以上と予想されるため、何らかの分解が可能と考えられる。仮にニヴフ語の -yi が分解可能である場合、MK kwoy 'cat' と関係があるかもしれない。借用の方向について、OJ wo が語尾以外に出現するのは例外的であるのでニヴフ語由来とする方が妥当かもしれない。

(35) PN *tvi- 'finish' = OJ tupi 'end'

OJ tupi は基本的に tupi-ni 'finally' の形で副詞的に用いられる。またこの単語は動詞 tupiyas- ~ tupiye- の語根 *tupi(y) 'spend' と関連していると考えられる。

(36) PN *(w)aly- 'open one's heart'⁶⁰

→ OJ paruk- ~ parak- 'open', MJ faruk- '(mind) becomes clear'

PN *(w)aly- 'open one's heart' は PN *aly- 'open' の派生語であり、Fortesque (2016) によれば語頭の子音は PN 接辞 *w(u)- 'reciprocal preffix' である。このことから元の意味は *'open to each other' と再構できる。

また OJ parak- ~ paruk- 'open' は第 29 代欽明天皇の和風諡号として以下のように確認されている⁶¹。

- ・天国押波流岐広庭天皇 Amey-kuni osi-**paruki** piro-nipa no sumyera-mikoto (古事記)
- ・天国排開広庭天皇 Amey-kuni osi-**paraki** piro-nipa no sumyera-mikoto (日本書紀)

加えて MJ における動詞 faruk- は心が晴れることを意味している。日本語には似たような単語として OJ pare- '(sky) becomes clear' が存在するが、この動詞の主要な意味は天候が晴れることであり、MJ faruk- とは別の語源を持つと考えられる。おそらく OJ pare- の語根 *√par(a)- とニヴフ語起源の語根 *√paruk(V)- が音韻・意味的に近かったために混同され、OJ parak- ~ paruk- のような変種及び MJ 動詞の意味が生まれたのだと推測できる (下の派生参照)。

- √par(a)- '(sky) becomes clear' : OJ pare- < √par(a)-Ai- 'id'
- √paruk- 'open (to each other)' (←PN) : OJ paruk- 'open'
- (混同) → OJ parak- 'open', MJ faruk-, faruke-, farukas- '(mind) becomes clear'

(37) PN *waqi 'box'⁶² → MK pakwoni, pakwulley 'basket' → OJ pakwo 'box'

朝鮮語の単語は諸方言において語頭が *pak- であることは一致しているが後半の形状には多くのバリエーションが存在し、様々な接辞が関与していると考えられる (Francis-Ratte 2016)。また日本語について OJ pakwo 'box' の他に MJ waku 'frame' も語源を共有している可能性がある。

⁶⁰ 仮にこの比較が成り立つとした場合、頭子音の関係から PN *wəri 'pustule' の例と同様に Amuric → Koreanic → Japonic という借用語の流れが想定できる。

⁶¹ 古事記では表音表記されているため直接確認できるが日本書紀の読みは伝統に基づく。

⁶² Nikolaev (2015b) では PN *vaq-ay 'box'

(38) PN *wela(y)- ‘naked’ → MK palkapes- ‘take off all clothes’ < *palka ‘naked’

cf. MK pes- ‘take off, remove’. 朝鮮語の母音は調和によって変化したものと考えられる。

(39) PN *yup < *i-hup- ‘tie, bind (tr)’ → OJ yup- ‘id’, PR *yup- ‘to do one’s hair’

ニヴフ語 *yup は *hup ‘tie, bind’ の他動詞形であり、他動詞化接頭辞 *i- については Nedjalkov (2013) も参照。また OJ yup- ‘tie, bind’ の同根語は南琉球を含めて琉球諸語に広くみられ、日琉祖語にさかのぼる語彙であることは間違いない。

Dougherty (2013) はこの単語がニヴフ語起源であり、アイヌ語を通して日琉祖語に借用されたと主張した。しかしアイヌ語 (の祖先) が日琉祖語の分岐以前の時代にニヴフ語および日本語族の両者と直接接触していたかは疑わしい。このため日琉祖語の単語はアイヌ語による媒介によってではなく、古い時代におけるアムール語族・日本語族間の直接的な言語接触によって借用された可能性が高い。

(40) PN *zaq ‘tomtit (Fortescue 2016), chickadee (Nikolaev 2015a)’

= MK say < *saCi ‘bird’ = OJ sazaki < sa-N-saki ‘small bird’

ニヴフ語の単語は小さいさえずる鳥を指すようである。日本語の sazaki は sa-N-saki small-GEN-bird と分解できる。

3.3 扶余民族と関わりが深い語彙 (No. 41-43)

(41) PN *məkər- ‘straight’ = Koguryō⁶³ *mak(a)ri → POK *mak(a)ri ‘true, right (正)’

中国の史書に記録されている高句麗の君主号 “莫離支” (MC mak lje tsye OC * m^hak [r]aj ke) は 莫離 + 支 と分解でき、後半の支 *ke は扶余及び朝鮮の称号として ‘王・君主’ を意味する語であることが知られている (Pellard 2014)。また前半の莫離 *mak(a)ri について、日本書紀の仮名注に見られる以下のような百濟の称号の第一成分と同一であると考えられる。歴史的に見ても百濟語 *mak(a)ri は高句麗語からの借用と推定でき、下記の例からその意味は ‘true, right (正)’ だと判断できる⁶⁴。

original text	gloss	kana-transcription
・正夫人	‘true queen (consort)’	makari-oriku
・世子	‘heir < true child’	makari-yomo
・上臣	‘supreme minister’	makari-daro

ニヴフ語 *məkər- の意味は ‘straight’ であるが同じ語根を持つ *may(-tur) ‘true, right’ を考慮すると元の意味が ‘正しい’ であることが強く示唆される⁶⁵。またニヴフ語の単語はより単純な語根からの派生であるため、借用の方向はアムール語族から百濟語であることが確認できる。

⁶³ この名称は便宜的なものである

⁶⁴ 従って高句麗の称号である莫離支は ‘true king’ を意味すると推定できる (Beckwith 2004)。

⁶⁵ PN *may-n ‘very < *truly’ も同じ語根を持つと思われる。またここで見られる ‘真っ直ぐ’ と ‘正しい’ の意味変化は他の言語にも例が存在する (cf. Ancient Greek orthos ‘true, right, straight’)。

(42) PN *(er)i 'river'⁶⁶ = Koguryō *ir(i) 'riverhead, deep water (淵)'

高句麗の武将“淵蓋蘇文”の名前は日本書記において“伊犁柯須彌” iri kasumi と転写されており、姓の“淵”が仮名転写“iri”と対応していることからこの単語が確認できる。母音と意味の対応には若干の弱さが見られるが周辺の他の言語に該当するような語彙が無く、アムール語族が語源である可能性は高い。

(43) PN *χotan 'town' → POK *KUtan~KUtar 'city(-state)' → OJ *kutana~kutara 'Paekche'

NJ kudara は古代朝鮮三国の一つである百済を示す語であるが、日本語としては解釈ができず、朝鮮の古語(百済語)に由来しているという見解がおおむね認められている。この百済語の単語が PN *χotan 'town' と関連しているということを以下に論じる。

この単語は上代日本語で表音表記されていないため、まず OJ 語形を再構する。日本語において百済の語形には以下の三種類のバリエーションが存在する。

- ・ kudara : 現代日本語では最も一般的である。
- ・ kutara : 久寿良木(クタラギ) 姓などにみられる。
- ・ kutana : 山口県の地名「百済部(クタナベ)」や「百済部(クタナベ)神社」に確認できる。

二音節目 ta~da の変種については日本語内の音韻変化で説明が付き、元の語形の清音 /t/ が後世において濁音 /d/ に変化したと考えるられる⁶⁷。一方で三音節目 na~ra のバリエーションは日本語内部の変化では説明がつかないため、両方の変種を(日本語における)基本形として扱う必要がある。従って上代日本語における語形は OJ *kutana~kutara と記述できる。

次に上代日本語の語形のもととなった百済語の語形を推測する。ここでは以下の三点が重要となる。

- ・ 北東アジアにおいて、n~r の変種は音節末子音でしばしばみられる現象である⁶⁸。
→ 上代日本語における kutana~kutara の末母音 a は挿入音と考えられる
- ・ 上代日本語の母音 u は pre-OJ の母音 *u 乃至 *o を反映する (Miyake 2003)。
- ・ 上代日本語は軟口蓋閉鎖音 /k/ 以外の喉音を持たず、外国語における軟口蓋音 (k~x)、口蓋垂音 (q~χ)、および声門摩擦音 (h) などを全て閉鎖音 /k/ として受け入れる。

上記をまとめると(先)上代日本語に輸入された百済語の語形は *KUtan~KUtar と表せる⁶⁹。ここで求めら

⁶⁶ ニヴフ語の単語は方言によって eri もしくは i として確認できる。このように消失する r は PN *a(ra)qm 'hail' の例でも見られ、両者ともに日本語において閉鎖音 /t/ ではなく流音 /r/ で反映されているのは興味深い。

⁶⁷ 日本語において清音から濁音への変化は他にも多くの例がある (cf. 現代日本語 namida '涙' < OJ namita)。一方で濁音から清音への変化は例外的である (Martin 1987 も参照)。

⁶⁸ 参考: 讚 (MC tsan) の日本語における反映: 二合仮名 'sara ← sar', 音読み 'san'

⁶⁹ K は何らかの喉音 (軟口蓋音、口蓋垂音、声門音), U は後舌母音 o~u。

れた百済語の語形は PN *χotan ‘town’ をはじめ、ユーラシア大陸に広く分布する '村落・都市' を表す単語⁷⁰と非常に似ており、関連している可能性が高い。また意味変化としては、もともと城塞(都市)をあらわしていた単語が国全体をあらわすようになったものと考えられる。

百済語の *KUtan~KUtar は朝鮮語内部では分析ができず、外部から導入されたものだと考えられ、歴史的な経緯からみても朝鮮・日本においては扶余系統の言語によってもたらされた語彙であるとみられる。加えてこの語はアイヌ(祖)語にも *kotan ‘village’ として見られるが、このような古い時代に大陸由来の語がアイヌ語に導入される経路は限られる。アイヌ語とニヴフ語は先史時代の接触があったことが知られており (Vovin 2016)、その際にニヴフ語からアイヌ語にこの語が借用されたと考えるのが最も自然である⁷¹。このためアムール語族において *χotan (の同根語) は古い時代に存在していた単語であると推定でき⁷²、日本語・百済語における語彙がニヴフ語起源であるとする積極的な証拠は小さいかもしれないが、その可能性は確かに存在する。

4. 考察

§3 を通して行ったアムール語族・日本語族・朝鮮語族の語彙比較から得られる言語学的な情報をまとめると以下のような事実が示唆される。

A. アムール語族と日本語族、アムール語族と朝鮮語族の間に言語接触があった。

共通語彙の存在から明らかである。またアムール語族-日本語族、アムール語族-朝鮮語族それぞれの間でのみ共有されている語彙があることから、間接的な言語接触だけではなくアムール語族との直接的な言語接触も(一部は)存在していたと考えられる。

B. 上記言語接触は時系列的に複層構造を持つ。

言語学的な情報から、少なくとも以下に示すような異なる二つの時代の言語接触があったことが示唆される。

B-1. より古い言語接触

たとえば以下のような要素は日流祖語の段階から存在する語彙がアムール語族の語彙と共通する例であり、非常に古い言語接触の影響を反映していると考えられる。

⁷⁰ この単語はユーラシアに広く分布する *Wanderwort* であり、関連する語彙はウイグル語 : hotan (ホータン市)、モンゴル語 : qotan (都市)、満州語 : hoton (都市)、アイヌ語 : kotan (コタン、村)などにみられる。究極的な語源は不詳である。

⁷¹ 歴史的にみるとアイヌ人と接触したニヴフ語話者はオホーツク文化人に比定される。

⁷² 仮に現代ニヴフ語の χotan が最近の借用語だとしても、それ以前に異なる形態で(アイヌ語の祖型となった)同根語を保有していたと考えられる。

の経路をたどっているかは定かではない。

C. 言語接触の背景・時期・場所

B-1 に相当する古い言語接触において、言語の影響の流れにはっきりとした方向性は見られない。このためこの言語接触においては話者同士の社会的立場の優劣はあまり明確ではなく、各言語話者が地理的に近い条件で共存していたために語彙が共有されるにいたったものとみることができる。各語族の地理的分布を歴史的に遡れば、この共存が生じた場所は広義の満州地域であったものと推定でき⁷⁴、時代としては日本語族・朝鮮語族がそれぞれ分岐する以前と考えられる。

一方で B-2 に相当する新しい言語接触においてははっきりとした傾向が存在し、アムール語族 → 百済語 → 先上代日本語という影響の流れが確認できる。従ってアムール語族話者がこれらの言語（先上代日本語、百済語）話者に対して該当する時代（後述）に文化的に“優位”な立場にあったことということが言語学的分析から得られる見解である。また言語接触が生じた時代・場所を歴史的・言語学的情報から推定すると、百済語においては朝鮮三国時代（百済語・新羅語の分岐後）の朝鮮半島南西部、日本語においては古墳-大和時代（日本語派・琉球語派の分岐後⁷⁵）の日本列島となる。

D. 言語史と歴史の整合

言語史は歴史と一体であり、言語学的知見は考古学的知見・遺伝学的知見などと同様に書記記録に残らない情報を保存している。また言語学・考古学・遺伝学などで得られる情報は記述者の恣意性を含む記録よりもある意味“中立”とすることもできる（もっとも解釈の恣意性は存在する）。

今回の言語学的な調査で得られた情報はアムール語族が過去の北東アジアの言語世界において大きな影響力を持った存在であり、現在のニヴフ語がおかれている社会状況とはまったく異なることを示している。またこの影響は上代日本語及び百済語において最も顕著であることも判明している。各言語がアムール語族の影響を受けた時期と場所はそれぞれ、百済語においては百済国設立後の王国領域、上代日本語においては大和王権黎明期におけるその版図と重なる。このような時期と地理の条件において多大な影響力を持ったこのアムール語族に属する言語話者を歴史上の民族集団に同定するならば、扶余民族が最有力候補であり、彼らの固有言語を試論的に扶余語と呼ぶことができる。

E. 北東アジアの言語史には謎が残る。

最後に、今回行った言語学的な調査から示唆される三語族の歴史的なかわりを図 4.1 にまとめる。本稿で議論した内容は北東アジアの言語史全体から言えば部分的なものであり、三語族の関係についても未だに判然としない事柄はいくつも存在する。以下に挙げるような謎に対して将来的な研究が新たな知見をもたらしてくれることを願う。

⁷⁴ Janhunen (2010) も参照。

⁷⁵ 日本語・琉球語の分岐について、服部 (1959) は言語年代学の手法を用いて西暦約 500 年と推定した。また Pellard (2016) も同様の年代 (3-7 世紀) が妥当としている。

◇アムール語族・日本語族・朝鮮語族についてはっきりとはしない項目

- ・扶余民族の言語とニヴフ語が同系統だとして、ニヴフ(祖)語は扶余語の直接の子孫か?
- ・朝鮮半島における日本語族 (Peninsular Japonic) はいつまで存続したのか? 地理的な範囲はどこまで広がっていたのか? 百濟語と半島日本語族の言語接触はどの程度存在したのか?
- ・朝鮮半島において朝鮮語族が広まっていった過程はどのようなものか? 新羅語と百濟語の言語学的な相違はどの程度であったのか?
- ・百濟における扶余語はいつまで存続したのか?
- ・扶余語と上代日本語の直接的な言語接触はあったのか? 両者の共通語彙はどの程度が百濟語を介したものであったのか?
- ・中世朝鮮語にはどの程度百濟語の影響が存在するのか?
- ・高句麗における扶余語の普及はどの程度であったのか? 社会的地位はどのように変遷したのか? 時代的にはいつまで存続していたのか?

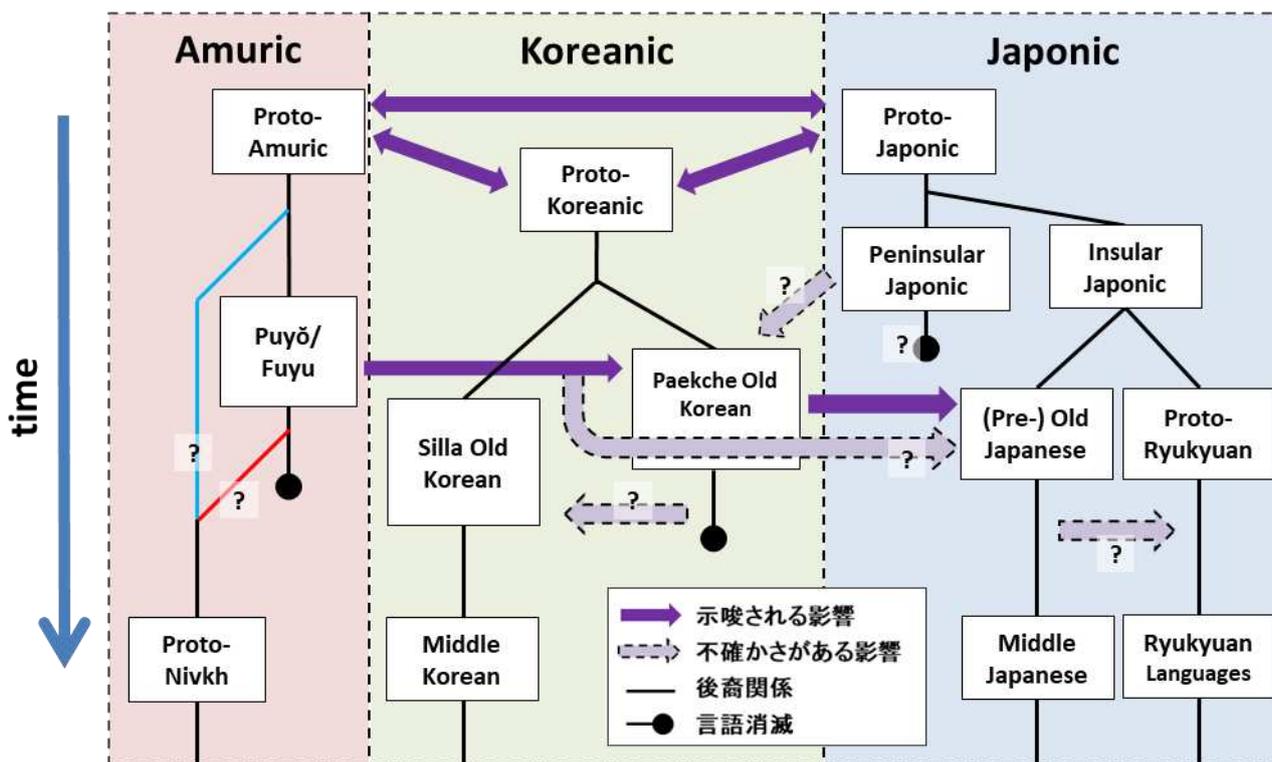


図 4.1 言語学的な解析から再構される各語族の歴史的関わり

5. 総括

本稿では言語学的な観点から北東アジアにおけるニヴフ語（アムール語族）の歴史を探求した。日本及び朝鮮に分布する言語とニヴフ語の語彙比較から、アムール語族・日本語族・朝鮮語族の間の言語接触が存在したことが強く示されている。また言語学的な分析からこの接触は時系列的に複層構造を持つことも判明した。より古い接触はこれら三語族が地理的に近い条件で共存していたことを示しており、時代としては日本語族・朝鮮語族がそれぞれまだ祖語段階であった時期、場所としては満州地域における言語接触を反映していると思われる。一方で新しい時代の接触ではアムール語族 → 朝鮮語族 → 日本語族という明確な影響の流れが見られ、アムール語族話者が朝鮮語族話者・日本語族話者に対して強い文化的影響力を持っていたことが暗示される。このような構図は朝鮮においては三国時代の百済領域、日本においては古墳時代に相当する時期の大和王権版図に存在していたと考えられる。このアムール語族に属する言語話者を歴史的な集団に同定するならば扶余民族が最有力候補であり、その言語を本稿では扶余語と仮称した。本稿の内容はあくまで試論であり、決して最終的な結論ではない。今後の更なる言語学的研究が、北東アジア言語史の理解を深めてゆくことを期待している。

付録 A : 問題がある語彙比較 (No. 44-128)

ここで列挙する語彙の比較は意味や音韻の対応における問題が大きく、実際に関連しているか不確かな要素が大きい。しかし将来的にニヴフ語・日本語・朝鮮語の研究が進むことでこれらの比較に新たな光が当たることもありえるため、参考のために記載する。順番はニヴフ語語彙のアルファベット順である。

(44) PN *acik 'grandmother, mother-in-law' = MK ezi 'mother, parent', acomi 'aunt'
(?= MJ si-fito 'parent-in-law'⁷⁶)

PN *apak 'uncle' = MK api 'father,'

PN *əcy 'old man' = MK azo 'uncle,' acapanim 'uncle'

PN *əmək 'mother' = MK emi 'id' = COJ omo, EOJ amo 'id'

PN *əmyi 'son-in-law' = OJ mukwo < PJ mo-ko⁷⁷ 'son-in-law, bridegroom'

PN *a- 'kinship prefix' の項目で記載した親族名称の一部の比較である。ニヴフ語は本来複雑な親族名称体系を有しており、詳細は Anttonen (2014) を参照。

またニヴフ語の親族名称には PN *ətək 'father', *əmək 'mother', *nanak 'sister' をはじめとして語尾に K(V) という音が多く、何らかの共通形態素である可能性がある。この場合、例えば PN *əmyi 'son-in-law' について接頭辞 *ə- と接尾辞 *-K(V) を除いた語根は *mV と分解ができ、PJ mo-ko 'son-in-law, bridegroom' の第一成分と比較できる。

(45) PN *ayi- 'not want' = OJ ak- 'get tired of'

意味の対応に不確かさがある。またこの PN 単語と反対の意味を持つ PN *ayn'(i)- 'want' が OJ akani < ak-an-i 'get.tired.of-NEG-INF' と音韻的に近いのは興味深い。

(46) PN *an- 'who, where', *an-q 'who', *na-r 'who' (Nikolaev 2015b)

= COJ nani 'what', EOJ an- 'id', PR *nau 'id'

Nikolaev (2015b)によればニヴフ語の語形はすべて同じ語根を持つ。日本語 'ナニ' に相当する疑問詞は日本語族内の対応が非常に不規則なことで知られ、祖型の構築が難しい。日本語族内のバリエーションはニヴフ語からの借用、もしくはニヴフ語の *an--na-と偶然音韻的に近かった固有語に対するニヴフ語単語の干渉によって説明できるかもしれない。

(47) PN *anyi 'heel' = MJ tubu-naki 'ankle'

MJ tubu-fusi 'ankle', PR *tubusi 'knee'などを考慮すると MJ tubu の意味は 'joint' と推定でき、*naki の元の意味は 'heel' である可能性がある。

(48) PN *az- 'call' = MJ aza-na 'courtesy name' < *'calling name'

意味の対応が推測的である。

⁷⁶ もともとは義父のことを指し、後に義母のことも意味するようになったらしい。

⁷⁷ 琉球諸語との比較から第一母音は *o であったと再構できる。

(49) PN *bayzu- ‘separate’ = MJ wakat- ‘separate (tr)’ < PJ *√wak(a)- ‘separate’

PN *b と MJ /w/ の対応は問題がある。

(50) PN *bayla- ‘red’ → MJ wakura-ba ‘reddened leaves (due to disease)’

PN *b と MJ /w/ の対応は問題がある。

MJ wakura-ba (病葉) は病気で赤くなった葉を意味し、語源不詳である。この単語の確かな初出は「精選版日本国語大辞典」によると 1597 年であり、非常に遅い。しかし以下に示す MYS.8.1618 に見られる OJ wawara-ba (和々良葉) は写本によっては wakura-ba (和久良葉) としても確認されている。前者の wawara-ba は日本語のあらゆる記録の中でも孤語 (*hapax legomenon*) であり、語義・品詞が未詳である。このため後の時代においても出現する wakura-ba が本来の単語であったと考えた方が自然である。この単語は MJ では特に病気で赤くなった葉を意味するが、OJ では単に「赤い葉」を意味していたのかもしれない。

MYS.8.1618 (ここでは ”和々良”を “和久良” と読み替えた)

本文	転写	翻訳
玉尔貫	tama ni nuki	玉として(紐で)貫き
不令消賜良牟	keta-zu tabara-mu	消えないように頂きましょう
秋芽子乃	akipagwi no	秋萩の
宇礼和々良葉尔	ure wawaraba-ni	枝末のワクラバ (赤くなった葉) に
和久良	wakuraba	
置有白露	ok-yeru siratuyu	置いてある白露を

(51) PN *ban(t)- ‘grow, produce’ = OJ payas ~ paye- < *√pay(a)- ‘grow’

OJ (及び PJ) 動詞において、子音 -n, -d, -z, -y, -w で終わる動詞語幹は存在しない。しかしこれらの子音 C に対して -C(V) で終わる動詞語根は存在し、以下にその例を示す。

語根 : *√id(a)- ‘go out’ > 語幹 : idas- ‘put out’ < *√id(a)-As-
 : ide- ‘go out’ < *√id(a)-Ai-,
 : *id- (子音語幹、存在しない)

上記のような現象がみられる理由について、はっきりとしたことはわかっていない。ただ少なくとも以下の一例において -d(V)- で終わる語根に対して該当箇所が -y(V)- で置き換わっている変種が存在し、何らかの口蓋化によって n, d, z のような子音が消失したことが要因の一つである可能性がある。

*√kud(u)- ‘collapse’ > kudus- (tr) ~ kudure- (intr)
 *√kuy(a)- ‘collapse’ > kuyas- (tr) ~ kuye- (intr)

上記を考慮すると OJ *√pay(a)- < *√pad(a) < *√pant(a) ‘grow’ のような祖型を想定することもでき、PN

動詞との比較が(非常に推測的ではあるが)理論上は可能である。

(52) PN *calm ‘palm’ → OJ tana- ‘id’

OJ tana- は tana-kokoro ‘palm’, tana-ura ‘palm’ などの語で見られる。この語は通常 ta-na- ‘hand-GEN-’ と分析されるがなぜ助詞が no ではなく na であるのか説明がつかない。このため tana で一語であるとも考えることも可能である。ただ PN -lm- と OJ -n- の対応が成り立つかは定かではない。

(53) PN *capŋ ‘pincer’ = MK cap- ‘grasp, hold’

意味の対応がやや推測的である。

(54) PN *car- ‘full’ = MK cola- ‘suffice’ = OJ *tar- ‘suffice’

意味・音韻の対応に問題がある。

(55) PN *cor- ‘melt’ → MJ tokē- ‘melt, untie’ < *√twok(V)- ‘melt’

一般に MJ tok- ~ tokē- ‘melt’ は OJ tok- ~ tokey- ‘untie’ から派生したと考えられている。しかし OJ tok- に ‘melt’ の意味は見られず、もともと別の語であったという可能性もある。その場合確認されていない OJ 動詞 ‘melt’ の第一母音が wo (=oi) であればニヅフ語形と比較できる。この仮定が正しければ MJ tok- は二つの異なる OJ 動詞 tok- ‘untie’ と *twok- ‘melt’ が混交した結果であり、以下にこの二つの動詞派生の過程をまとめる。

*√tok(o)- ‘untie’ : tok- ‘untie(tr)’, tokey- < *√tok(o)-Ai- ‘untie (intr)’
*√twok(V)- ‘melt’ : *twok- ‘melt(tr)’, *twokey- < *√twok(V)-Ai- ‘melt(intr)’
(混合) → MJ tok-, tokē- ‘melt, untie’

(56) PN *cqa ‘hate’ = MJ isakap- < *isak(a)-Ap- ‘quarrel’

cf. AN esqa-d ‘loathe, hate’。意味の対応に問題がある。

(57) AN c’xəmz-d’, Nogliki Nivkh c’xam-d ‘grip, grasp, squeeze’ (Halm 2018)

→ OJ tukam- ‘grip, grasp’

日本語の単語は OJ tuka ‘handle, hand (unit of length)’ と関連していると思われる。

(58) PN *darkraŋ < *dark-raq(V) ‘capercaillie’ = MK tolk ‘chicken’

PN *-raq は鳥類名称における接尾辞だと考えられる (該当項目参照)。「capercaillie」はライチョウの一種である。

(59) PN *d'eqa- 'firm' = OJ sika-to 'certainly, clearly', OJ siko 'strong, tough?'

AN 単語の用例を Nedjalkov (2013) から一部引用する。意味合いとしては現代日本語における「しっかりしている」のニュアンスが近いかもしれない。

Hə+xe-gu ceka-d'-yu.

that+net-pl be.strong-ind-pl

'These fishing nets are strong.'

p: plural, ind: indicative

「これらの網は頑丈である。」

Lur ceqa-ge...

ice be.strong-conv:dur/inst

'As soon as the ice became strong...'

conv: converb, dur: durative, inst: instantaneous

「氷が頑丈になるとすぐ...」

また大国主の別名である葦原色許男神 (asi-para *siko*-wo no kamwi) にみられる *siko* は辞書に '強く頑丈' という意味が記載されているがこの意味が確かか定かではない。

(60) PN *dəŋ 'strength, energy' = OJ ti 'id'

音韻対応に問題がある。

(61) PN *dol '(expanse of) water', *du 'lake', dor 'sandy spit' = OJ tu 'harbor, spring'

PN の三つの単語から pre-PN *dU 'expanse of water'⁷⁸ のような語根を想定することが可能と考えられ、OJ tu 'harbor, spring' との比較ができる。

(62) PN *d'e- 'three', *nə(r) 'four', *to(r) 'five'

= MK seyh < *seki 'three', neyh < *neki 'four', tasos 'five'

朝鮮語の数詞は基本的な 1-10 の数詞と十の倍数である 20, 30, 40... の数詞の間の関係が非常に不規則であることが知られている (Francis-Ratte 2015, 表 A.1 参照)。この不規則さは外国語の影響である可能性もあり、ニヴフ語数詞 3, 4, 5 と対応する朝鮮語数詞の音韻的な近さを考えるとアムール語族の数詞によって朝鮮語固有の数詞の一部が置き換えられたと考えることもできる。ただし両者の関係は規則的とは言い難く、現時点ではあくまで推測に留まる。

⁷⁸ この語根とは関係していないが、PN には *d'o 'beach' という単語も存在し、こちらも OJ tu と音韻的には比較可能である。

表 A.1 ニヴフ語と中世朝鮮語の数詞一覧

number	PN		MK		number	MK
1	*n'ə-		honah	-	-	-
2	*me-		twulh ⁷⁹	≠	20	sumulh
3	*d'e-	?=	seyh ⁸⁰	?=	30	syelhun
4	*nə(r)	?=	neyh ⁸¹	≠	40	mazon
5	*to(r)	?=	tasos	≠	50	swuyn
6	*ɲar		yesus	?=	60	yesywuyn
7	*ɲamk		nilkwop	=	70	nilhun
8	*minr ⁸²		yetulp ⁸³	=	80	yetun
9	*n'an-		ahwop	=	90	ahon
10	*myo-		yelh	-	100	won

(63) PN d'evrq < d'ev-raq 'small bird' = MK ceypi 'swallow' = MJ kafa-sebi 'kingfisher'

PN 接辞 -raq については該当項目参照。NJ kawa-semi に見られる semi は MJ sebi, sobi, soni などの変種があり⁸⁴、元の母音が不明瞭である。音韻対応の問題に加え、PN 単語が鳥一般を指すのに対して MK・MJ の単語は特定の種類の鳥を指すため意味の対応にも弱さがある。

(64) PN *d'iv 'road, path' → OJ ti 'way'

ニヴフ語単語の母音 i が二重母音 Vy にさかのぼる場合に対応が成り立つ可能性がある。

(65) AN ec 'plain wooden dish' → OJ ita 'board'

ニヴフ語の単語は平たいものを数える際の助数詞としても用いられ、もともとはより一般的に 'board' という意味を持っていたか可能性がある。Gruzdeva (2004) を参照。

(66) PN *ger 'dirt' = OJ kitana- < kita-na- 'dirty'

日本語における -na- は形容詞派生形態素であり否定形容詞 na- とは異なる。

(67) PN *gəy(gəy) 'swan' = MK kwohay, kwohway 'id' = OJ kukupi, kupi 'id'

- ・ニヴフ語の単語は疊語のようである。PN *ə と日本語・朝鮮語の後舌母音の対応には問題がある。
- ・日本語の語形は OJ kukupi ~ kupi に加えて MJ kofu ~ kofi の変種が存在し、母音が安定しない。
- ・Francis-Ratte (2016) によれば MK kwohway < *kwohowoy < pK *kokopi という祖型が再構可能。

⁷⁹ PN *donr 'twin' と関連している可能性がある。

⁸⁰ MK seyh < *seki。OJ saki-kusa (三枝) の saki として日本語に借用された。AN qos 'twig (for stringing smelt)' の項目も参照。

⁸¹ MK seyh との類推から neyh < *neki とされる。

⁸² PN *minr 'eight' は *me- 'two' と *nə(r) 'four' の複合語と考えられる。

⁸³ MK yetulp 'eight' と twulh 'two' が何かしら関係している可能性がある。

⁸⁴ これらが実際に同根語なのかは定かではない。

- ・日本語・朝鮮語の単語に見られる語末の *-pi* は鳥類名称における接辞と定義できるかもしれない。

(68) PN *gəl- 'long' = MK kil- 'id'

母音の対応に問題がある。

(69) PN *giwr < gi-wr '(straw) insole' = OJ wara 'straw', wata 'cotton, stuffing'

PN *gi 'footwear' を考慮すれば、PN *wr は履物に対する詰め物を意味すると考えられる。この語形は OJ wara 'straw' や wata 'cotton, stuffing' と比較が可能であるが確かではない。

(70) PN *gulyu(l)r 'wheel' = OJ kuruma < *kuru-ma 'cart'

ニヴフ語の単語は畳語のようである。日本語の単語はおそらく *kuru-ma と分解できる⁸⁵。

(71) PN *gunt [root *gun-] 'that (absent)' = MK ku 'that (mesial)'

PN *gunt に見られる語尾 *-(u)nt* は他に *dunt 'this', *hunt 'that', tunt 'what', *tant 'which' などにもみられる。

(72) PN *gakala- 'bright, light' → OJ kakaywop- 'shine', kagayak- 'id' < *√ka(N)kay(V)- 'shine'

ニヴフ語の単語は畳語のようである。音韻対応に問題がある。

(73) PN *ha- 'be or do such' → OJ ka- 'be such'

PN *ha- 'be or do such' は PN *hunt 'that' と関連しているようである。

(74) PN *hala 'well then' → OJ kara 'ablative case marker'

OJ kara は接続助詞としても用いられ、kara-ni 'then, just because'、mono-kara 'although' などに見られる。いずれにせよ意味の対応が定かではない。

(75) PN *hex- 'to hear about, feel' (Nikolaev 2015a) → OJ kik- 'hear'

音韻の対応に問題がある。

(76) PN *hil- 'flame, blaze up' → OJ ir- 'fry, broil'

PN *i-hil > il- → OJ ir- のような借用仮定を想定できる (i- は他動詞化接辞)。ただし意味の対応には問題がある。

(77) PN *hily < *hil-y 'tongue' = MK hye < pre-MK *hyel 'id'

PN *hily は *helel- 'lick' と同じ語根を持つ (Nikolaev 2015a)。

⁸⁵ cf. MJ kuru-kuru, koro-koro 'turning, rolling'.

(78) PN *hirk 'thread' → MK sil 'id'

朝鮮語において hi → si の口蓋化を想定した。

(79) PN *ivŋ 'he/she' = MK i- 'this'

指示代名詞と三人称代名詞の関係は言語学的によく見られる現象である。

(80) PN *kant 'stick (noun)' = MK kaci 'branch'

意味・音韻対応が定かではない。

(81) SSN kař eskŋ 'east' = MJ koti 'east wind'

cf. PN *gadr 'back', *herqŋ 'direction'. また Beckwith (2004) によれば三国史記高句麗地名に *kati (加知) 'east (東)' という単語が見られる。

(82) PN *ke- 'put on (clothing)', *kir- 'use, wear' = OJ ki- 'wear'

ニヴフ語の二つの動詞の関連は不明であるが、いずれかが OJ と関連している可能性はある。

(83) PN *keŋ 'sun' = MK hoy 'sun' = OJ -(u)ka, key 'day'

音韻対応に問題がある。

(84) PN *kəŋri 'duck' → OJ kari 'goose'

両方とも水鳥を指す。関連している場合ニヴフ語から日本語への借用時に語中の ŋ が脱落したと想定できる。

(85) PN *k(ə)vər 'intestines' = MJ kafara 'enlargement of the abdomen (due to disease)'

MJ kafara は主に子供の腹が膨れる病気を指すが語源不詳である⁸⁶。PN 単語と意味が一致しないが、もともと *k(ə)vər 'intestines' + [SWELL] という複合語が存在し、借用の際に日本語で前半だけ抜き取られたのかもしれない。

(86) PN *kəvŋəv 'spider' = OJ kumo < *kubo 'spider' ? = MK kemuy 'id'

ニヴフ語の単語は豊語のようである。日本語の単語は琉球諸語の語形を考慮すると pre-OJ *kubo からの派生と考えられる。各言語で母音がマッチしない上に PN /v/ と MK /m/ の対応が成り立つかは非常に怪しい。

(87) PN *kro- 'hang' = MK kel- 'id'

音韻対応が定かではない。

⁸⁶ 後半は MJ fara 'belly, abdomen' と解析できそうだが後に NJ kawara と音変化しているため、ka + fara という語源認識は (少なくとも話者においては) 薄かったようである。

(88) PN *-la ‘permanent property’ = OJ -ra ‘?’

・ニヴフ語 -la は一部の quality verb に接続する接尾辞であり、永続的な性質を表す (Nedjalkov 2013)。

・OJ -ra は一部の形容詞に接続する接尾辞であるがその意味は定かではない (Vovin 2008)。

ex. OJ aka- ‘red’, aka-ra- ‘red?’

(89) PN *la ‘wind’, *lar ‘wave’ → OJ nami < *na-mi ‘wave’, nada ‘rough sea’

OJ nami は三国史記高句麗地名 内買 *namey ‘rough water (瀑池)’ と同根語であると考えられ (Beckwith 2004)、また第二要素 mi~*mey が ‘water’ の意味であることはほぼ確実である。語頭に流音を持たない日本語においてニヴフ語の l- が n- で反映されると想定すると⁸⁷、nami~*namey に見られる第一要素と以下のようなニヴフ語のいくつかの単語を比較することが可能である。

*la ‘wind’, *lar ‘wave’, *lark- ‘float’, *lar(lar)- ‘sway’

試論的には *na-mi ‘wave’ の第一要素 na を PN *la ‘wind’ の借用とすることができる。また上記に加えて以下のように OJ nada ‘rough sea’ と PN lar ‘wave’ の比較も可能である。

PN *lar < *lad(V) → OJ *nata > nada (nasal assimilation)

(90) PN *lav ‘go side by side’ → OJ nam- ‘line up’, narab- ‘line up’

OJ nam- にはある種の “延長形” と見られる動詞 narab- が存在する。この対応は頭子音 n- が潜在的な流音を表していると考えると理解しやすい⁸⁸ (下記参照)。

PN *lav → OJ *nab- > nam- (nasal assimilation)

PN *lav-lav- (reduplication)⁸⁹ → OJ narab-

(91) PN *lar ‘seaweed’ → OJ nori ‘t.o. seaweed’

上の例と同様に PN *l- = OJ n- を想定した。

(92) PN *loraj ‘crane’ → MK wolhi ‘duck, heron’

PN *liy-r ‘wolf’ → MK ilhV ‘id’ の関係と同様に、MK における音位転換を想定した。この比較は MK wolhi の -lhi が PN 接尾辞 *-raq と同根であるとする分析とは両立できない。

(93) PN *malyo- ‘much, many’ = MK manho- ‘many’ → OJ (a)mane- ‘id’

PN -l- = MK -n- を想定したが定かではない。OJ (a)mane- との同根語は琉球諸語にみられず、借用語

⁸⁷ ニヴフ語の l が借用語において n で反映される例としては PN *tlanji < tVlanjay ‘reindeer’ → Sakhalin Ainu tunakay ‘id’ がある。

⁸⁸ 同様の考えが Unger (1993) においても提唱されている。

⁸⁹ ニヴフ語において、畳語の動詞語幹は PN *lar((lar)- ‘sway’, *law(law)- ‘argue’, *ler(ler)- ‘slip’ など複数確認できる。

と見られる。

(94) PN *murŋ ‘horse’ = MK mor ‘id’ = PJ *uma ‘id’

“馬”を意味する共通の語が中央アジア・東アジアで広く用いられていることはよく知られている。この語はモンゴル語 (*morin)、ツングース語 (*murin) にも見られ、中国語 馬 (OC *mra) も同源である。借用の経路はモンゴル語→ツングース語→ニヴフ語、および中国語→日本語と考えられている (Janhunen 1998, 2016)。このためこれらの語彙が関連していることは確かであるが、ニヴフ語・日本語・朝鮮語の言語接触に由来する共通語彙とは言い難い。

(95) PN *no- ‘braid, weave’ = OJ nuno < PJ *nono ‘cloth’

PJ 単語の派生過程が不明である。

(96) PN *nuŷ ‘needle’ = OJ nuk- ‘pierce’

意味の対応が推測的である。

(97) PN *n’ayr ‘rat’ = OJ ne ‘id’

PN *n’ayr ‘rat’ の語根は *n’a(y) であると考えられ⁹⁰、以下のような借用経路が可能かもしれない。

PN *n’a(y) → pre-OJ *nia → OJ n(y)e

(98) PN *n’(ə)lami < *n’ə-lami ‘one of a pair’ = OJ nomwi ‘only’

ニヴフ語の単語は *n’ə- ‘one’ の複合語と考えられる。

(99) PN *(n’ə)kra- ‘aim at’ → OJ nerap- ‘id’

cf. PN n’əŋay ‘eye’。音韻対応に問題がある。

(100) PN *ŋayri ‘shoulder’ = MJ kaigane ~ karigane ‘shoulder blade’, OJ kata ‘shoulder’

日本語の単語について MJ karigane ‘shoulder blade’ < kari-ga-ne ‘shoulder-GEN-root’ のような分析が可能であり、第一成分 *kari についてニヴフ語 *ŋayri < *ŋa-γVri ‘shoulder’ の第二成分との比較が可能である。

加えて PN *γVri ‘shoulder’ のさらに古形として pre-PN *gVdVy のような語形を考えることができるが、こちらは OJ kata ‘shoulder’ と比較でき、より古い言語接触による共通語彙である可能性がある。

(101) PN *ŋawr ‘intestines, guts’ = OJ wata ‘id’

Halm (2018) によれば *ŋawr に見られる最終子音 r は接辞であり、語根は *ŋaw である。これが正しい場合日本語の単語との比較は難しい。

⁹⁰ cf. PN *tayr ‘ground squirrel’。

(102) PN *pa- ‘put on one’s legs’ = OJ pak- < *√pa-Ak- ‘put on (lower body clothing, footwear)’

意味的には近いが日本語の動詞が分解できるか定かではない。

(103) PN *par(par)- ‘flap wings’ = MJ fata-mek- ‘id’, fatafata ‘sound of flapping’

日本語の単語はオノマトペ由来と思われる。

(104) PN *perŋ ‘worm or (crawling) insect’ = OJ piru ‘leech’

音韻及び意味の対応が弱い。

(105) PN *porlor ‘make hole’ = OJ por- ‘dig’

PN 動詞の -lor が接辞であれば比較が成り立つが定かではない。

(106) PN *prarq- ‘snap’ = MJ fatatak- ‘(thunder) rumbles’

意味の対応が弱い。また日本語の単語はオノマトペ由来と思われる。

(107) PN *p’u-, *p’uy- ‘to set fire, shine (sun)’ (Nikolaev 2015a)

= OJ pwi, po- ‘fire’ < pwoy ? = MK pul ‘fire’

ニヴフ語の動詞と日本語・朝鮮語の名詞の比較になる。MK pul は母音が対応に問題がある。

(108) PN *qalŋ ‘scabbard’ = OJ kara ‘shell’

意味の対応が推測的である。

(109) PN *q’arχ- ‘dry’ (Nikolaev 2015a) = OJ kare- ~ karas- < *√kar(a)- ‘dry’

ニヴフ語単語の語末子音が日本語で反映されていない。

(110) PN *qorla ‘mind, soul’ = OJ kokoro ‘heart, feeling’

母音・意味の対応に問題がある。

(111) PN -raq ‘suffix in bird names’ = pre-MK *-raki ‘id’ = MJ fitaki ‘t.o. bird’

・PN *-raq は *qoy(rq) ‘pigeon’, *darkrar ‘capercaillie’, d’evrq ‘(small) bird’ などに見られ、鳥類名称につく接尾辞と考えられる。

・朝鮮語に関して、MK の鳥類語彙 cwuraki ‘quail’, pitwulki ‘pigeon’, wolhi ‘duck, heron’ などから語尾 *-raki を分解できるかもしれない。

・日本語において、MJ fitaki が fi-taki と分解できる場合、接尾辞 *taki がニヴフ語と比較できる。語頭の fi は MJ fibari ‘skylark’, fifa ‘t.o. bird’ などの鳥類名称と共通しているかもしれない⁹¹。

⁹¹ この中で MJ fibari < OJ pibari は最初の母音が甲類であることが確認できるが MJ fitaki, fifa に関しては不明である。MJ fitaki の表記の一つ「火焼」が上代日本語の民間語源を反映しているとすれば第一音節が乙類 pwi と推定でき、PN *bəyŋa ‘bird’ < *buy-ŋa ‘fly-animal’ の第一要素との比較が可能かも

(112) PN *ta- ‘where’, *tant ‘which’, *tamci-‘what kind’ *tunt ‘what’ = OJ ta- ‘who’

ニヴフ語では疑問詞一般に見られる形態素であるのに対して日本語では‘誰’のみに現れる。また琉球諸語の反映系を考えると PJ 語形は *taru~taro であると思われるため音韻的な対応も弱くなる。

(113) PN *taka ‘up’ = OJ taka- ‘high’

意味の対応が弱い。

(114) PN *tə ‘door, hole in ice’ = OJ two ‘door, gate’

母音の対応に問題がある。音韻的に OJ two ‘door, gate’ は PN *to ‘semi-subterranean house’ との方がよく対応するがこちらは意味の対応に問題がある。

(115) AN təvə- ‘enter house’ (Nedjalkov 2013) = OJ top- ‘visit (house)’

ニヴフ語の動詞は個人によって təvə-, təvu-, təvy- などの語形が確認され安定しない。OJ top- ‘visit’ は twop- ‘ask’ と別の語である。また OJ topor- ‘go through’, topos- ‘make it go through’の語根 *√top(o)- ‘go through’ も関係があるかもしれない。

(116) PN *to- ‘take (somewhere)’^{92, 93} = OJ tor- ~ twor- ‘take’ ?= MK tul- ‘holds up, raises’

Bentley (1999) によれば OJ には二つの動詞 tor- ‘take, pickup, capture’ と twor- ‘hold, support’ が存在する。ニヴフ語の単語との比較において母音の対応は後者の方が良いが、意味的には前者の方が近い。また朝鮮語の語形も母音の対応に問題がある。

(117) PN *tuyr ‘bed’ = OJ toko ‘bed’, tokoro ‘place’ ?= MK theh ‘ground, foundation, place’

母音の対応に問題がある。また MK 単語との比較は意味の対応も弱い。

(118) PN *turi ‘bridge’ = MK toli ‘bridge’

母音の対応に問題がある。日本語に関して、OJ tut- ‘transmit’、OJ eturi⁹⁴ ‘framework (for roof thatch)’ などの単語が関連しているかもしれない。

(119) PN *-(u)k ‘locative/allative case marker’ (Fortescue 2011)

= MK -k / -h ‘locative suffix’ = OJ -ko ~ka ‘place’

- ・ニヴフ語の接尾辞は格標識以外にも řa-k ‘where’ などの語彙にみられる (Fortescue 2011)。
- ・日本語の接尾辞は ko-ko ‘here’, so-ko ‘there’, umi-ka ‘oceanside’ などにみられる。
- ・朝鮮語の接尾辞の例は wuh ‘above,’ mith ‘below’, pask ‘outside’ など多数ある (Francis-Ratte 2016)。

しれない。

⁹² Fortescue (2016) によれば派生によっては *tor- という語幹も現れる。

⁹³ 三国史記の高句麗地名に見られる towng(冬) ‘to take (取)’ も関連している可能性がある。(Beckwith, 2004)

⁹⁴ 古事記では蘆藿と表記され、注で哀都利 (eturi) と表音されている。語源不詳。

(120) PN *-v ‘nominalizer’ = MK -pa ‘id’

PN 接尾辞 *-v は *d’ilv ‘autumn’, *honv ‘spring’, *dolv ‘summer’, nav ‘now’ などに見られ、「X の場所/時」などを表す名詞を造る。MK -pa は「X のこと」といった意味を表す形式名詞である。

(121) PN *wa ‘sword’ → OJ pa ‘blade’

ニヴフ語の単語は PN *wal ‘cut off’ と関連していると考えられる。

(122) PN *wal- ‘cut off’ → MK poli- ‘cut, chop’

音韻対応に問題がある。

(123) PN *xem ‘seed, grain’ (Nikolaev 2017) = OJ kibi < *kimi ‘millet’

意味・音韻の対応に問題がある。琉球諸語の語形を考えると日本祖語の語形は *kimi と推定できる。

(124) PN *yor ‘daughter-in-law’ = MJ yome < OJ *ywo-mye? ‘daughter-in-law, bride’

PN *əmyi ‘son-in-law’ の項目も参照。MJ yo-me の第二成分が OJ mye ‘woman’ であることは確かであるが、第一音節が甲類 ywo か乙類 yo かは不明である。

(125) PN *(y)uli ‘knit, weave’ = MK yel- ‘tie, weave’ → OJ yor- ‘braid, twist’

PN 単語と MK・OJ 単語の間では母音が対応しない。また OJ yor- は琉球諸語にみられないため朝鮮語からの借用語とみられる (Vovin 2010)。

(126) PN *yuy- ‘go into’ = OJ yuk- ‘go’

意味の対応が定かではない。

(127) PN *walk(i) ‘chain’ =

OJ wa ‘ring’, MJ wag-, wagum-, wagane- < *√waNk(V)- ‘bend, roll, make ring’

意味の対応が推測的である。

(128) PN *warc- ‘be torn’ = OJ wawak- ‘be torn, be disordered’

OJ で第一音節の繰り返しが生じた可能性がある。

Nivkh Elements in the Languages of Japan and Korea and Their Implications for the Linguistic (Pre-)History of Northeast Asia.

MIYANO, Satoshi⁹⁵

Abstract

This paper investigates the prehistory of Nivkh language in the Northeast Asia linguistic area. Although the language is endangered today, linguistic information suggests that it once occupied a more central and influential position in the region. In historical context, Nivkh (or Amuric) may be related to the language of ancient Puyǒ/Fuyu ethnic group of Manchuria, who putatively had profound influence on the history of Korean kingdom of Paekche and Yamato dynasty of Japan. This paper evaluates this hypothesis on linguistic grounds, by examining shared vocabulary among Amuric, Japonic, and Koreanic. Directions of the linguistic influence, time and places of the contacts, and their historical implications are inferred from linguistic material. Finally, I will offer a tentative and partial reconstruction of the linguistic (pre-)history of Northeast Asia.

⁹⁵ Unaffiliated. srampax90@gmail.com

参考文献

- [1] Anttonen, A., Luukkonen, J., Sandman, E., Santalahti, S., Ylitalo, T., & Gruzdeva, E, 2016. Attritional Phenomena in the Nivkh Language on Sakhalin. *Studia Orientalia Electronica*, 117, 201-225. Retrieved from <https://journal.fi/store/article/view/59480>
- [2] Arisaka, Hideyo (有坂英世), 1934. 古代日本語における音節結合の法則” 國語と國文學 22(1).
- [3] Baxter, W. H., & Sagart, L. 2014. *Old Chinese: A new reconstruction*. Oxford University Press.
- [4] Beckwith, Christopher I, 2004. *Koguryo: The Language of Japan's Continental Relatives*. Leiden & Boston: Brill.
- [5] Bentley, John R, 1999. "The verb toru in Old Japanese." *Journal of East Asian Linguistics* 8.2: 131-146.
- [6] Bentley, John R, 2000. "A new look at Paekche and Korean: Data from Nihon shoki." *Ehak yenkwu*. 36:2.417-43.
- [7] Dougherty, Thomas, 2013. [Conference Presentation] “Prehistoric Language Contact in Northeast Asia in a Single Lexical Item” 9 August 2013.
- [8] Egami, Namio, 1964. *The formation of the people and the origin of the state in Japan. Memoirs of the Toyo Bunko* 23 (1964): 35-70.
- [9] Egami, Namio(江上波夫), 1967. 「騎馬民族国家」 中公新書.
- [10] Fortescue, Michael, 2011. "The relationship of Nivkh to Chukotko-Kamchatkan revisited." *Lingua* 121.8 : 1359-1376.
- [11] Fortescue, Michael, 2016. “Comparative Nivkh Dictionary.” *Lincom*.
- [12] Francis-Ratte, Alexande, 2015. “The Origins of the Korean Numeral System in Comparative Perspective” International Conference on Korean Linguistics.
- [13] Francis-Ratte, Alexander, 2016. *Proto-Korean-Japanese: a new reconstruction of the common origin of the Japanese and Korean languages*. Diss. The Ohio State University.
- [14] Frellesvig, Bjarke, 2010. *A history of the Japanese language*. Cambridge University Press.
- [15] Frellesvig, Bjarke, and John Whitman, 2016. "The historical source of the bigrade transitivity alternations in Japanese." in Kageyama, Taro, and Wesley M. Jacobsen, eds. *Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond*. Vol. 297. Walter de Gruyter GmbH & Co KG.
- [16] Gruzdeva, Ekaterina, 2004. "Numeral classifiers in Nivkh." *STUF-Language Typology and Universals* 57.2-3: 300-329.
- [17] Halm, Robert, 2017. "Application of the comparative method to vocoid sequences in Nivkh."
- [18] Halm, Robert, and Jay Slater, 2018. "Application of the comparative method to Nivkh: Other regular sound correspondences."
- [19] Hattori, Shiro (服部四郎), 1959. 「日本語の系統」 東京：岩波書店.
- [20] Jakobson, Roman (1958).“Notes on Gilyak”.In: *The Bulletin of the Institute of History and Philology Academia Sinica* 29.1: 272–274.
- [21] Janhunen, Juha, 1998. "The horse in East Asia: reviewing the linguistic evidence." *The Bronze Age and Early Iron Age peoples of Eastern Central Asia* 1: 415-430.
- [22] Janhunen, Juha, 2005. "The lost languages of Koguryo." *Journal of Inner and East Asian Studies* 2.2: 65-86.
- [23] Janhunen, Juha, 2010. "Reconstructing the language map of prehistorical Northeast Asia." *Studia Orientalia Electronica* 108: 281-304.

- [24] Janhunen, Juha, 2016. "Reconstructio externa linguae ghiliacorum." *Studia Orientalia Electronica* 117: 3-27.
- [25] Ledyard, Gari, 1975. "Galloping along with the Horseriders: Looking for the Founders of Japan." *Journal of Japanese studies* 1.2 (1975): 217-254.
- [26] Martin, Samuel Elmo, 1987. *The Japanese language through time*. New Haven: Yale University Press.
- [27] Matsuo, Toshiro (松尾俊郎), 1952. 「崖を意味する地名」 ("A Study of Place Names Meaning "Escarpment".) 新地理 1.2: 1-10.
- [28] Mattissen, Johanna, 2003. *Dependent-head synthesis in Nivkh: A contribution to a typology of polysynthesis*. Vol. 57. John Benjamins Publishing.
- [29] Miyake, Marc Hideo, 2003. "Philological evidence for* e and* o in Pre-Old Japanese." *Diachronica* 20.1: 83-137.
- [30] Miyake, Marc Hideo, 2013. *Old Japanese: A phonetic reconstruction*. Routledge.
- [31] Nedjalkov, Vladimir P., and Galina A. Otaina, 2013. *A syntax of the Nivkh language: The Amur dialect*. Vol. 139. John Benjamins Publishing.
- [32] Omodaka, Hisataka ,et al (澤瀉久孝), 1967. 「時代別国語大辞典上代編」三省堂.
- [33] Russell, Kerri L, 2006. *A Reconstruction and Morphophonemic Analysis of Proto-Japonic Verbal Morphology*. Diss. University of Hawai'i.
- [34] Nikolaev, Sergei L, 2015a. "Toward the reconstruction of Proto-Algonquian-Wakashan. Part 1: proof of the Algonquian-Wakashan relationship." *Journal of Language Relationship* 13(1): 23–61.
- [35] Nikolaev, Sergei L, 2015b. "Toward the reconstruction of Proto-Algonquian-Wakashan. Part 2: Algonquian-Wakashan sound correspondences." *Journal of Language Relationship* 13(4): 289–328.
- [36] Nikolaev, Sergei L, 2017. "Toward the reconstruction of Proto-Algonquian-Wakashan. Part 3: The Algonquian-Wakashan 110-item wordlist." *Journal of Lstemanguage Relationship* 15 (4): 250-278.
- [37] Panfilov, Vladimir Z, 1962. "Grammatika nivxskogo jazyka" 1. Moskva, Leningrad: Nauka.
- [38] Pellard, Thomas, 2014. "The awakened lord: the name of the Buddha in East Asia." *Journal of the American Oriental Society* 134.4: 689-698.
- [39] Pellard, Thomas. 2016. 「日琉祖語の分岐年代」田窪行則・平子達也(編)『琉球諸語と古代日本語：日琉祖語の再建に向けて』99–124.東京:くろしお出版.
- [40] Pellard, Thomas, 2017. "A (more) comparative approach to some Japanese etymologies." *Studies in Japanese and Korean Historical and Theoretical Linguistics and Beyond*. BRILL, 56-65.
- [41] Starostin, Sergei A., et al, 2003. *Etymological dictionary of the Altaic languages*. Leiden: Brill.
- [42] 小学館国語辞典編集部, 2006. 「日本国語大辞典 精選版」小学館.
- [43] Unger, J. Marshall, 1993 [1977]. *Studies in Early Japanese Morphophonemics*. Bloomington: Indiana University Linguistics Club Publications. 2nd revised edition.
- [44] Unger, J. Marshall, (2009). *The role of contact in the origins of the Japanese and Korean languages*. University of Hawai'i Press.
- [45] Unger, J. Marshall, (2014). "No rush to judgment: the case against Japanese as an isolate." *NINJAL Project Review* 4.3: 211-230.
- [46] Vovin, Alexander, 2010. *Korea-Japonica: a re-evaluation of a common genetic origin*. University of Hawaii Press.
- [47] Vovin, Alexander, 2013. "From Koguryō to T'amna: Slowly riding to the South with speakers of Proto-Korean."

Korean Linguistics 15.2: 222-240.

- [48] Vovin, Alexander, 2016. "On the Linguistic Prehistory of Hokkaido." On the Languages of Hokkaidō and Sakhalin. Ed. by J. Janhunen (в печати).
- [49] Vovin, Alexander, 2017. "Origins of the Japanese Language." *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics*.
- [50] Whitman, John, 1985. *The phonological basis for the comparison of Japanese and Korean*. Harvard University.
- [51] Whitman, John, 2012. "The relationship between Japanese and Korean." *The languages of Japan and Korea*: 24-38.